



Title	北歐アイスランド文学の歴史 (3) : ハルドウル・ラハスネスから20世紀末まで
Author(s)	清水, 誠; Shimizu, Makoto
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 130, 69(左)-124(左)
Issue Date	2010-02-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42726
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARCS130_003.pdf



北欧アイスランド文学の歴史 (3) — ハルドウル・ラハスネスから 20 世紀末まで —

清 水 誠

Íslensk bókmenntasaga (3) — frá Halldór Laxness til aldarloka —
(*The Annual Report on Cultural Science* No. 130. Graduate School of
Letters, Hokkaido University. Sapporo/Japan. 2010. ISSN 1346-0277)

SHIMIZU, Makoto

(mshimizu@lit.let.hokudai.ac.jp)

9. 現代文学への革新 — 散文文学の隆盛 —

9.1. 1930 年代の社会と文学 — 散文文学の台頭

第一次大戦の戦禍から免れたとはいえ、間接的余波はアルジング創設千年祭を祝った 1930 年にアイスランドを襲った。大戦中の対外貿易に依存した経済発展は、前年に端を発した世界恐慌の渦にたちまち呑み込まれた。失業率の高まりと階級闘争の中で、同年、共産党が結成された。その主張をアイスランドの有力作家の多くは支持する立場に回った。30 年代はまた、アイスランド社会が一軒家の農場が互いに孤立して点在する伝統的農民社会から都市中心社会に大きく移行した時期に当たる。都市労働者階級が形成され、マルクス主義を旗印に労働運動が盛んになった。社会批判はすでに自然主義時代の文芸思潮にも見られたが、今回は短命に終わらず、政治的な現実に根ざした社会主義的自然主義文学という潮流として定着していった。

ヨーロッパの舞台に立つことになったアイスランド文学は、もはやその影

響から自由の身ではなく、伝統からの革新を余儀なくされた。大陸ヨーロッパでの動向とほぼ時を同じくして、表現主義とそれに続く超現実主義(シュールレアリズム)の波を体験した新しい世代が現代的な形態を実験的に導入した。それ以前の文学はロマン派であれ、自然主義であれ、祖国とその歴史を題材とすることが原則だった。そうした国民主義的な文学からの脱皮が強く志向されるようになったのである。

前世紀の中心的ジャンルだった叙情詩は、エイナル・ベーネディフツソンによる1930年の最後の詩集をもって、その座をひとまず退いた。そして、中世サガ文学の終焉^{しゅうえん}以来、自然主義の短い興隆期をはさんで、およそ600年ぶりに散文文学が主導的地位に躍り出た。その代表的立役者となったのは、以下で述べるソウルベルグル・ソウルザルソン、グヴズムンドゥル G. ハーガリーンとオウラヴル・ヨウハン・シーグルソン、そして、何よりもハルドウル・ラハスネスである。とりわけソウルベルグルはアイスランド国内で現代文学への革新を提唱し、実践した。そして、ハルドウルの業績によって、近代以降のアイスランド文学は初めてアイスランド語による作品を通して世界に認められた。以前の世代と異なり、アイスランド人は外国語ではなく、母語によって国際的視野から新しい時代の作品を書く姿勢を定めたのである。

9.2. ソウルベルグル・ソウルザルソン — 現代散文文学の革新者

ソウルベルグル・ソウルザルソン (Þórbergur Þórðarson 1888~1974) は南東部の辺境に生まれた。ほとんど独学だが、レイキャヴィークの教員養成学校と大学で学ぶ機会を得て、貧困と苦学の中で新ロマン派詩人ステーファウン・フラウ・クヴィータダールと知り合った。さまざまな学問分野に打ち込み、学生時代から民謡と地方語彙の収集を始めている。1919~35年には免許を取得せずにレイキャヴィークで教職に恵まれ、生活の安定を得た。

ソウルベルグルは詩人として出発した。初期の詩作品は1922年の『白い大鴉^{がらす}』(*Hvítir hrafnar*) にまとめられている。この題名は新ロマン派詩人ダーヴィズ・ステーファウンソンの『黒い羽』のパロディーであり、ステーファウンとダーヴィズの民衆詩とエイナル・ベーネディフツソンの象徴詩をとも

に拒否する姿勢を見せている。東洋哲学から影響を受け、ヨガを実践するなどしたが、まもなく社会主義に転じ、1924年にその маниフェスト と言うべき超現実主義の手法を用いた『ラウラへの手紙』(*Bréf til Láru*) を発表した。同書は36段落からなる長文の手紙の形式を取り、過去20年の間に自ら経験して得た知見を教会、資本主義、伝統的農民社会など、既存の秩序にたいする率直な批判として展開したものである。文学的手法の面では、あらゆる文体的ヴァリエーションを駆使し、語法的にも規範からの逸脱を恐れず、グロテスクな表現によって伝統的なレトリックの空虚さを暴いた。書簡、自伝、小説、論説という既存のジャンルの壁を突き破り、混沌とした断片の集合の観を呈している。作品の構造的完結性を捨象し、言語と現実と意味の安定した対応の解体を試みることで、新しい散文文学の可能性を提示したこの問題作は、大きな論争の火種をつけた。同年に発表されたフランスのアンドレ・ブルトン (André Breton 1896~1966) による『シュールレアリズム宣言』と比肩されることもある。

ソウルベルグルはまた、国際語としてのエスペラント語を支持し、実践し、教授した。エスペラント語の文法書と読本も残している。政治や文化をめぐって新聞・雑誌にも健筆を振った。1934年にはソ連を訪問して、その印象を皮肉な調子でエッセイに記し、新聞コラムにナチズム批判の論説を載せて、ヒトラーから危険視されたこともある。自己および他者の人間観察にすぐれたソウルベルグルは、自伝および伝記文学を小説と並ぶ重要な文芸ジャンルに高めた。青年時代の思い出を真実のまま克明に再現した『アイスランドの貴族』(*Íslenzkur aðall* 1938)、『偉才人 I-II』(*Ofvitinn I-II* 1940~41) がその一例である。古来、アイスランドに貴族階級は存在せず、前者の題名は諧謔^{かいぎやく}とパロディーの表現である。人物描写への尽きない意欲は、幼年時代に出会った牧師の思い出『アウルトニ・ソウラリンソンの伝記 I-VI』(*Evisaga Árna prófasts Þórarinssonar I-VI* 1945~50)、姪の幼年時代を幼児の視点からつづった『花の賛歌 I-II』(*Sálmurinn um blómið I-II* 1954~55) などの伝記に結実した。

ソウルベルグルはハルドウル・ラハスネスと違って、もっぱらアイスラン

ド国内で活動し、純文学の中心から離れてはいたが、つねに新たな文学様式と言語表現を求め続けた。その業績を認められて、1974年にはアイスランド大学から名誉博士の称号を贈られている。

9.3. ハルドウル・ラハスネス — 現代アイスランド文学の世界的巨匠

ハルドウル・ラハスネス (Halldór Laxness 1902~98) は初期のデンマーク語による習作を除けば、前述のシーグルズル・ノルダルによる『死者の国の女神』に接して以来、もっぱらアイスランド語で作品を書いた。1955年にアイスランド人として初めてノーベル文学賞を受賞するなど、世界に認められた現代アイスランド文学の巨匠である。半世紀以上にわたる旺盛な創作活動と目まぐるしい思想遍歴を経て、ソウルベルグルが提唱した新しい文学のありかたを巨大な長編小説群によって世界に示した功績は、本書では十分に詳述できない。以下ではその作品に触れるための手引きにとどめたい。

ハルドウルは1902年に道路工夫の息子としてレイキャヴィークに生まれた。本名はハルドウル・グヴズヨウンソン (Halldór Guðjónsson) だが、1905年に父親が農場を構えた近郊のラハスネス (Laxnes < lax 「鮭」+ nes 「岬」) にちなんで、下記の処女作出版を契機に改名した。カトリックに改宗した23年以降は、7世紀のアイルランド人聖者の名前を冠してハルドウル・キリアン・ラハスネス (Halldór Kiljan Laxness) と名乗ったが、63年に再びもとの名前に改めた。読み書きが不自由だった母方の祖母から祖国の歴史や文学の話聞いて育ち、レイキャヴィーク普通ギムナジウムで一冬を学んだが、創作に励んで学業をおろそかにし、19年に父親の死もあって退学した。同年、ノルウェーの作家クニユート・ハムスン (Knut Hamsun) の影響を受けて、伝統的な形式による新ロマン派的小説『自然児』 (*Barn náttúrunnar*) を発表し、17歳で文壇に登場した。

その後は長く海外を巡り、第一次大戦後の世界を広く経験した。1919~20年にはデンマークに渡り、21~22年にはドイツ、オーストリアなどに暮らして表現主義の影響を受けた。アメリカ行きの申請が許可されず、デンマークのボーンホルム島 (Bornholm) で出会ったアイスランド女性との間に子供を

宿したことを深く後悔するなどして、デンマークのカトリック詩人イエアンセン (Johannes Jørgensen 1866～1956) の勧めでルクセンブルクのクレルヴォー (Clervaux) にあるベネディクト修道院に入り、1か月後の23年1月にはカトリックに改宗した。エッセイ集『カトリック的見解』(*Kapólsk viðhorf* 1925) では、カトリック教会を擁護して、前述のソウルベルグル・ソウルザルソンの『ラウラへの手紙』への反論を展開している。23年秋から24年初めはイギリスの修道院で過ごした。

24年初めに帰国し、25年春から夏までイタリアのシチリア島で過ごした後、再びクレルヴォー滞在を経て完成したのが、大戦後のヨーロッパ各地での経験をもとに、宗教的理念と芸術的理想のジレンマを描いた自伝的小説『カシミールの偉大な職工』(*Vefarinn mikli frá Kasmír* 1927) である。過去の伝統を断ち切って現代文学を極めようとする才能豊かな若い男性ステイトン・エトリージ (Steinn Elliði) は、神への献身と禁欲による魂の救済との葛藤に悩む。ステイトンを慕う幼なじみの魅力的な女性ディリアウ (Dilja) は世俗の愛の象徴であり、修道士となる誓いを立てた直後のステイトンと関係を持ち、すべてを捨ててローマに赴く。しかし、ステイトンはその愛を振り切って神への奉仕を選択する。このいかにも理想主義的な筋書きは、表現主義、ダダイズム、超現実主義の手法を駆使したポリフォニー的に錯綜する文体の渦中にちりばめられていた。出版社の理解を得られず、自費出版したこの若き日のハルドウルの野心作は、ソウルベルグルの『ラウラへの手紙』と並んで、伝統的な語りの形式からの決別を宣言した問題作となった。

この作品を区切りとしてヨーロッパ的文化世界から離れ、カナダを経て、27年にカリフォルニアに渡ったハルドウルは、アメリカの資本主義社会の矛盾を目の当たりにした。そして、社会派作家シンクレア (Upton Sinclair 1878～1968) との出会いを通して熱烈な共産主義者となり、エッセイ集『民衆の書』(*Alþýðubókin* 1929) で資本主義社会批判を展開した。以下で紹介する文芸誌『赤いペン』に健筆を振るい、32～33年にはソ連旅行に出ている。この時期に刊行した数少ない詩作品『小詩集』(*Kvæðakver* 1930) も共産主義的色彩が強い。

心理的テーマから社会批判への転換は、帰国した 1930 年以降の成熟した長編小説群に反映された。個人と現実世界との関係に関心が向けられ、文体的革新性に伝統的なサガ文学の流れを汲む客観的で雄大な叙事性が加わった。この時期を代表するのは、物語作家としてのハルドウルの力量が遺憾なく発揮され、後述する『アイスランドの鐘』と並んで近現代アイスランド文学の最高傑作と評される次の 3 作である。いずれも変革の波の中で、伝統的生活を守り抜こうとする主人公の苦闘を批判的な目を交えて描いている。『サルカ・ヴァルカ I-II』(*Salka-Valka I-II* 1931~32) では、貧しいが精力的な漁師の娘で私生児のサルカ・ヴァルカ、『独立の民 I-II』(*Sjálfstætt fólk I-II* 1934~35) では、孤高の英雄的農夫と云うべき伝統的一軒家の農場主ビャルトゥル (Bjartur)、『この世の光 I-IV』(*Heimsljós I-IV* 1937~40) では、周囲の荒波に無視され傷つけられ続けるが、ついにはこの世の光となって美の精彩を放つ民衆詩人オウラヴル (Ólafur) がそれである。それぞれ複数の作品として別の題名で発表されたが、多数の外国語に翻訳されたのを機会に改題し、まとめ直したものである。『独立の民 I-II』はナチス時代のドイツで発行禁止処分を受けた。この作品には山室 静／林 譲二／山口琢磨の 3 氏による英訳などからの日本語訳がある。

40 年代には歴史的テーマに取り組んだ。その最初の作品で代表作のひとつとなったのが、アイスランドが最大の苦難に直面した 1700 年当時を舞台にした『アイスランドの鐘 I-III』(*Íslandsklukkan I-III* 1943~46) である。これは不屈の農民ヨウン (Jón) が理想化された乙女スナイフリーズル・イースランソウル (Snæfríður Íslandssól, 「雪 (snæ-) のように美しい女性 (-fríður), アイスランドの (Íslands-) 太陽 (-sól)」の意味) と前述の文献学者アウルトニ・マグヌソン (1663~1730) の化身である写本収集家アルナス・アルネーウス (ラ Arnas Arnæus) との出会いによって、アイスランド人としてのアイデンティティを死守する過程を描いた感動的な物語である。この作品は、1940~46 年にかけてナチス・ドイツの侵略を防ぐ名目でイギリス軍、ついでアメリカ軍の進駐を受け、祖国の独立が危ぶまれた時期に書かれ、国民にかつての苦難の時代の文化的偉業と人間の尊厳に改めて注意を喚起した。やは

り元来、異なる題名の3部作をまとめたものである。『スナイフリーズル・イスランソウル』(*Snæfríður Íslandssól* 1950)の題名で、ハルドウル自身の手で戯曲化されてもいる。

続く『原爆基地』(*Atómstöðin* 1948)は、この時期の唯一の同時代小説である。第二次大戦中の好景気に沸いたアイスランド社会と、デンマークからの完全独立を宣言した1944年後も政府がアメリカ軍の駐留を容認したことへの抗議を込めて書かれた。レイキャヴィークに移り住んだ北部の辺境出身の初心な少女ウグラ(Ugla)の目から、当時の社会状況が批判的につづられている。山室 静氏による英訳などからの日本語訳がある。後述するように、アイスランドはその後、49年に賛美両論の中で非武装のまま北大西洋条約機構(NATO)に加盟し、これを理由に東西冷戦下の51年にアメリカ軍が南西部のケプラヴィーク(Keflavík)にNATOの基地を建設するに至る。

さて、ハルドウルは青年時代の一時期を除いて、ノーベル賞受賞演説でも述べているように、中世サガ文学の伝統をアイスランド人作家としての誇りとし、最大の敬意を払っていた。1940~46年には『ラクス谷のサガ』(*Laxdæla saga*)、『ニャールのサガ』(*Brennu-Njáls saga*)、『グレットイルのサガ』(*Grettis saga*)などを現代語の正書法に置き換えて発表している。今日では珍しくないこの試みは、当時はあたかも聖域を侵す行為として無理解を買うこともあった。しかし、古典作品を現代人の真の血肉にしようとする努力は、前述の文献学者シーグルズル・ノルダルの考えとも軌を一にしていた。ハルドウルの文学の圧倒的成功は、自国の文学的伝統との連結を抜きにしては考えられない。そして、まさにそこから題材を取り、サガの文体も模倣しながら、あえて換骨奪胎の形で小説化したのが『ゲェルプラ — 英雄たちの物語』(*Gerpla* 1952)である。この作品は『盟友たちのサガ』(*Fóstræðra saga*) (およびスノッリ・ストゥルトルソン ([スノッリ・ストゥルルソン]) の『聖オウラヴルのサガ』(*Ólafs saga hins helga*))の完全なパロディーであり、ヒトラー、スターリンを念頭に置いて、権力の座に就いた「英雄たち」(garpar)への盲目的礼賛に対して鳴らした警鐘である。

ノーベル文学賞を受賞した50年代半ば以降は、祖国の文化使節としての役

割を期待される中で左翼系思想が後退し、政治的、思想的、文学的、宗教的にいかなるドグマからも距離を置く姿勢が鮮明になった。農夫として清貧の生活を送った祖父の時代をなつかしむ語り手と、オペラ歌手を目指して世に出て行く男を対比させた『ブレヘクコート農場年代記』(Brekukotsannáll 1957)、モルモン教徒の聖地に赴くが、失望して荒れ果てた故郷の農場に戻る主人公を描いた『楽園の回復』(Paradísarheimt 1960)がその例である。自伝は6編残しており、『故郷を後に』(Heiman eg fór 1952)、『詩人の時』(Skáldatími 1963)、『わが家の庭で』(Í túninu heima 1975)、『若かりしころ』(Ungur eg var 1976)、『7人の巨匠の物語』(Sjömeistararagan 1978)、『ギリシアの年』(Grikklandsárið 1980)と続く(今日の正書法ではeg「私」をégに変更)。20歳までの人生を回想したもので、第3作では共産主義との決別を宣言している。

これと平行して強まっていったのが、青年時代から親しんでいた道教の影響である。63年にはカトリックの洗礼名「キリアン」を捨てている。ハルドウルは協力者との合作を除いて、6編の戯曲を残しているが、階級闘争と物質的欲望から無縁の素朴な洗濯屋のアイロン係を主人公にした最後の戯曲作品『鳩たちの饗宴』(Dúfnaveislan 1966)では、道教的な人生観が前面に出ている。上述の小説『原爆基地』でも、物質的・政治的格闘と無縁な世界に生きるオルガン奏者にその影響が見られる。小説については、1960年に従来の小説形式の限界を指摘し、8年間の空白が続いた。その後に発表したのが『氷河の下の子クリスト教遵守』(Kristnihald undir Jökli 1968)である。若い神学者が西部に突き出た半島部の氷河スナイフェルスイェクトル(Snaefellsjökull)の下に暮らす住民の生活調査を命じられて、現地へ赴く。教会は閉じられ、礼拝はずっと行われていない。しかし、教会の牧師は実生活上の献身で隣人愛を実践している。3日の予定の調査がさまざまな出来事が起こって延期され、神学者は失踪したはずの牧師の妻ウーア(Úa)とともに途中まで同行し、同地を去るという筋書きである。ユーモアと明るさの内に道教思想による幻想的な神秘主義を投影させたこの作品は、客観的叙事性を放棄し、安定した世界観と価値観への懐疑と錯綜する語り口を特徴とする。

ハルドウルは老境に入って、初期の現代小説の実験的試みに若返りした観がある。この作品は1970年に協力者との合作で戯曲化された。渡辺弘美氏による日本語訳『極北の秘教』がある。『教区年代記』(*Innansveitarkronika* 1970)と『神の恵みの唄』(*Guðsgjafapula* 1972)も晩年の作風を伝えている。前者は1945年に再婚して終の住処^{ついで すみか}を構えた生まれ故郷近郊のモースフェトル地方(Mosfellssveit)の教会での出来事をつづったものであり、後者では1920年以降のアイスランド経済の発達を批判的に描写している。72年にはアイスランド大学から名誉博士号を贈られた。96年以降は『ハルドウル・ラハスネス文学賞』(*Bókmenntaverðlaun Halldórs Laxness*)が授与されている。

ハルドウル・ラハスネスは思想的にも文体的にも停滞を嫌い、想像力と自己統制、大胆さと思慮深さ、荒々しさと繊細さ、真剣さとユーモア、寓話性と現実性といった相反する特質を抱えながら、国民主義と世界市民主義の両方の理想を希求しつつ、サガ文学の伝統と同時代のヨーロッパ文学の潮流をともに受け留めて、つねに芸術的革新を志向し続けた。その膨大な作品群は、アイスランド国民と現代世界の人々に伝えられた20世紀の文学的遺産である。日本語によるその他の文献には、『ノーベル賞文学全集13 ラックスネス、カミュ、アンドリッチ』所収の山口琢磨訳による受賞演説、『現代北歐文学18人集』の谷口幸男訳による短編『魚釣り行』(*Sjöstafakverid*)がある。

9.4. 散文文学の隆盛を担った小説家たち

20世紀の2回の世界大戦を挟んだ動乱期に活躍を開始し、1930年代に隆盛を迎えた散文文学の黄金時代を支えた作家は、ほかにも少なくない。ソウリル・ベルフソン、ハルドウル・ステーファウンソン、惜しくも結核で夭折したダーヴィズ・ソルヴァルツソン(Dauið Þorvaldsson 1901~32)、児童文学作家ステーファウン・ヨウンソン、故郷の南アイスランドを描いた小説で知られるグヴズムンドゥル・ダーニエルソン(Guðmundur Daníelsson 1910~90)などがその代表である。ここでは、なかでも重要なグヴズムンドゥル G. ハーガリーンとオウラヴル・ヨウハン・シーグルソンという2人の多作の大家を紹介しよう。

9.5. グヴズムンドゥル G. ハーガリーン — 庶民的知性派で社会派の物語作家

グヴズムンドゥル G. (=ギスラソン) ハーガリーン (Guðmundur G. (= Gíslason) Hagalín) 1898~1985) は北西部のイーサフィヤルザルシスラ (Ísafjarðarsýsla), アルトナルフィエルズル (Arnarfjörður) の先端のローキンハムラル (Lokinhamrar) に生まれ、北側のディーラフィエルズル (Dýrafjörður) のヌープル (Núpur) で学校教育を受けた。この地域は北西部に位置する西フィヨルド地方 (Vestfirðir) の中でも、とくに入り組んだフィヨルドと険しい山岳地帯に挟まれた辺境であり、人々は漁業で生計を立てていた。グヴズムンドゥルも 15 歳で漁師になって 4 年間に過ごし、書物にも親しんだ。1917 年にレイキャヴィーク普通ギムナジウムに学ぶ機会を得たが、中途退学して新聞社や編集などの職に就いた。20~23 年には東部のセイジスフィエルズル (Seyðisfjörður) で編集者として暮らし、社会主義に転じた。24~27 年にはノルウェーに滞在し、アイスランド文化について多数の講演を行った。1905 年に独立を達成した当時のノルウェーでは、今日の言語状況に連なる 2 つの国語が誕生していた。そのひとつは、数百年にわたって強制されたデンマーク語の規範を大幅に取り入れた、主流派で穏健派のリクスモール (riksmål) — 今日のブークモール (bokmål) —、もうひとつは、各地の方言を基盤とし、独立した第 2 の言語としてイーヴァル・オーセン (Ivar Aasen 1813~96) の努力で誕生した急進派の文章語ランスモール (landsmål) — 今日のニューノシュク (nynorsk) — である。グヴズムンドゥルは講演旅行でノルウェー各地を回る途上、オスロ首都圏以外の多くの地方で用いられる後者の言語による文学作品に親しんだ。帰国した 1929 年以降は、故郷の西フィヨルド地方一帯の中心地、イーサフィエルズル (Ísafjörður) の図書館員や学校教員を務め、社会民主主義者として政治活動にも従事した。46 年以降はレイキャヴィークとその近郊に住み、作家活動に専念しつつ、政府の文教政策に携わり、雑誌の編集を行い、大学で文学の講義も引き受けた。

グヴズムンドゥルはグンナル・グンナルソン、ハルドウル・ラハスネスと並ぶアイスランド文学屈指の多作家で、50 巻に達する膨大な作品がある。詩

人として出発したが、小説家に転じ、13編の長編小説、11巻の短編集、10巻の自伝、13巻の伝記、1巻の詩集、2巻のエッセイ集を残した。前述のソウルベルグル・ソウルザルソンとともに、重要な自伝・伝記作家でもある。このほかに翻訳も多い。新聞・雑誌にも政治、文学、文化一般について記事を多数掲載した。

作品には、故郷の西フィヨルド地方で漁業に従事する素朴な人々の生活を鋭い心理描写とユーモアを交えて描いたものが多い。地方色の強い作風は、北西部に特有の語彙や語法が散見される点にもうかがえる。ブルジョワ社会批判を基調とするが、悲劇性が前面に押し出されることは少ない。個人主義を標榜する孤高の主人公の運命をめぐる、おおらかな人間観察が作品の多くを覆っている。長編小説では、『ハムラヴィークのクリストルン』(*Kristrún í Hamravík* 1933)と『ヴォーガルのストウルトラ I-II』(*Sturla í Vogum I-II* 1938)がとくに名高い。前者では、北極圏をかすめる僻地の小屋で独り住まいを続ける年老いた未亡人クリストルンが、不安と恐れとは無縁な満ち足りた生活を紡ぐ様子が描かれている。後者では、孤児として育った頑強な農夫ストウルトラが独立して農場を獲得し、苦難の中で仲間と協力して社会活動を展開する過程を取り上げている。

グヴズムンドゥルは急激な革新性を目指したわけではないが、前述のヨウン・トレイスティと並ぶ卓越した物語作家である。地方性に根ざした庶民的気質を備え、散文文学の隆盛を担った社会的知性派の代表として評価が高い。

9.6. オウラヴル・ヨウハン・シーグルソン — 叙情性と写実性の小説家・詩人

オウラヴル・ヨウハン・シーグルソン (Ólafur Jóhann Sigurðsson 1918~88) はレイキャヴィークに近いアウルフタネース (Álftanes) のフリーズ (Hlíð) の農家に生まれ、6才から内陸寄りのグラブニングル (Grafningur) で独学のまま貧しい少年時代を過ごした。15才で作家になる決心をしてレイキャヴィークに出ると、さまざまな職に就いて生計を立て、弱冠16才で発表した童話集『白鳥の湖』(*Við Álftavatn* 1934) で世に出た。翌年には童話集

『夏の夕べ』(Um sumarkvöld 1935) を発表している。大恐慌の時代で生活は苦しく、後述する共産主義的性格の強い『赤いペン』のサークルに加わった。18歳のとき、ハルドウル・ラハスネスの影響で自身の経験を題材にした最初の小説『農場の陰』(Skuggarnir af bænum 1936)を刊行した。1936～37年にはコペンハーゲンに滞在したが、やはり飢えと貧窮に苦しんだ。後には大戦中の好景気に助けられ、出版社の校正係を経て、43～44年にアメリカのコロンビア大学で文学を学ぶ機会を得た。帰国後は作家活動に専念し、76年にアイスランド人として初めて「北欧協会文学賞」(Bókmenntaverðlaun Norðurlandaráðs)を受賞している。

オウラヴルは兩大戦間の世代を代表する作家のひとりで、急激な社会変動に伴う伝統の軽視や外国文化の流入に懐疑的な態度を取った。第二次大戦後は都市労働者の日常生活や貧困に目を向けた。その文体は叙情性と写実性を併せ持ち、陰影に富み、香り高いものである。激情や戦闘性は薄く、社会批判も行っているが、極端に走るものではない。静謐で慎ましやかな心情が醸し出す美しさと豊かさが印象的である。

代表作には、故郷での少年時代の体験をもとに、20世紀初頭の小農民の生活の苦難を語り手の若い女性の視点から回顧的に描いた長編小説『山と夢』(Fjallið og draumurinn 1944)と続編『早春の大地』(Vorköld jörð 1951)がある。第二次大戦中の好景気と道德の低下を批判的につづった3部作『時計』(Gangvirkið 1955)、『魔術と鬼火』(Seiður og hêlog 1977)、『竜と雀』(Drekar og smáfuglar 1983)がこれに続く。さらに、核時代の脅威にさらされた現代社会の問題点を保守的な立場から追及した『巢』(Hreiðrið 1972)がある。

短編や中編にも才能を発揮し、今日ではこちらの評価のほうがむしろ高い。中編小説の代表作には、17才の青年の初恋と成長を扱った叙情的小説『地の色彩』(Litbrigði jarðarinnar 1947)、これとは逆に老人の悲劇的な最期を題材にした『牧師ベズヴァルの手紙』(Bréf séra Böðvars 1965)がある。詩的才能にも恵まれ、第二次大戦後を中心に数冊の詩集を残している。上述の「北欧協会文学賞」は詩集『木の葉の船で』(Að laufferjum 1972)、『泉のほとり』

(*Ad brunnnum* 1974) にたいして贈られた。スタインバックなど、英文学の翻訳もある。

9.7. 第二次大戦前後の社会と文学——英米軍の駐留と戦中景気

30年代の経済恐慌の不安に襲われたアイスランド社会は、1940年に転機を迎えた。デンマークとノルウェーを侵略したナチス・ドイツが大西洋航海による南方進出ルートを得ることを阻止する目的で、イギリス軍は5月10日、アイスランドに進駐した。アイスランド人はナチス・ドイツよりも連合軍の保護を歓迎したが、中立維持の立場から抗議したものの、阻止はできなかった。翌年の7月7日、戦争で疲弊したイギリスに代わって、アメリカが地理的隣接性による国際協定と軍事保護を口実に駐留を開始した。その直後のアメリカ参戦で、アイスランドは連合軍への補給物資の輸送拠点として重要性を獲得した。大量の労働力が必要となり、国内の失業問題は一気に解決した。アイスランドの対外貿易は英米との相互協定に大幅に依存していたが、水産物の需要の拡大で未曾有の好景気が訪れた。戦時中の漁業と水産物の輸出には危険が伴い、アイスランドはアメリカ軍兵士よりも多くの割合の犠牲者を出した。漁船の損害も大きかったが、外国資本によるトロール漁船への代替で償われ、これは全漁獲高の3分の2にまで達した。物価の暴騰による代償は容易に補われ、戦中景気はアイスランド経済を革命的に変容させ、生活水準は著しく向上した。

ただし、インフレーションはアイスランド経済を恒常的に圧迫することにつながった。1950年には通貨クrouna (króna) の平価切下げを実施している。また、漁獲高を決定する海洋権の交渉は、1901年にイギリスと交わした領海の設定以降、国益を左右する要因となり、ヨーロッパ連合 (EU) の加盟交渉にもマイナスに作用して、21世紀初頭の経済危機の遠因ともなった。

9.8. 完全独立の達成とその後

1944年6月17日、独立運動の父ヨウン・シーグルソンの誕生日に合わせて、英米の後押しの約束のもとに大戦の終結を待たずして、アイスランドは

ナチス・ドイツの侵略によって関係を絶たれたデンマークから、シングヴェトリルで完全独立を宣言した。初代首相はコペンハーゲンのデンマーク大使を務めたスヴェイトン・ビェルトンソン (Sveinn Björnsson 1881~1952) である。デンマーク政府は国内の憤慨を抑えてこれを容認する立場を取り、こうして、アメリカ軍の駐留という占領下で、人口約13万人に過ぎないアイスランド共和国 (Lýðveldi Íslands) が現代世界の主権国家の仲間入りを実現した。46年には国連加盟を果たし、北欧諸国との外交関係も軌道に乗せた。

しかし、アメリカ軍は世界のその他の地域でもそうであるように、一時的だったはずの駐留を恒久的に認めるよう、アイスランド政府に不当な要求を突きつけた。これはアイスランドの中立政策に矛盾するものだったが、1946年、政府は戦時中に建設された南西部のケブラヴィーク (Keflavík) の空港に、軍の駐在は許さないが、施設の存続を容認する事態に追い込まれた。その後、東西冷戦の強まりにつれて、アイスランドは大激論の末に中立政策を放棄し、49年に北大西洋条約機構 (NATO) に加盟した。政府はそれでも外国軍の駐留を容認しない姿勢を表明していたが、2年後の朝鮮戦争の勃発で情勢は一変し、NATO側の軍隊としてアイスランドを保護する名目で、アメリカ軍がケブラヴィークに常駐することになった。こうして、その後の十数年間は、アメリカ軍基地とNATOの問題がアイスランド政治の最大の焦点になった。

9.9. ハルドウル・ステーファウンソン — 社会派短編小説の名手の市民作家

ハルドウル・ステーファウンソン (Halldór Stefánsson 1892~1979) は前述のソウルル・ベルフソンと並んで、心理描写に秀でた短編小説の名手として知られている。社会派の市民作家として、第二次大戦前後の世相を批判的に観察した傑作を残している。東部の北ムーラシスラ (Norður-Múlasýsla) の出身で、父親が郵便局員として赴任した南ムーラシスラ (Suður-Múlasýsla) のエスキフィエルズル (Eskifjörður) の町に育った。学校教育は短期間しか受けていない。エスキフィエルズルとレイキャヴィークで種々の職を経て銀行員となり、勤めのかたわら作品を書いた。

最初の作品は1921年に雑誌に匿名で発表したものだが、1930年のベルリン滞在中に初の短編集『素描』(*Í fáum dráttum*)を出版した。これは文壇の注目を引かなかったが、後述する『言語文化雑誌』などに作品を掲載し、高く評価されるようになった。放送劇や長編小説もいくつかあるが、短編小説を最も得意とした。ハルドウルの短編はきわめて緊密な構成を備え、資本主義社会への批判をその犠牲者である個人の立場に徹して描いた。小市民の生活を客観的な性格描写と倫理的視点から、ユーモアとペーソスを交えて写し出す手法を特徴とする。たとえば、ステーファウン・エイナルソン(Stefán Einarsson)が『アイスランド文学史 874～1960年』(*Íslensk bókmenntasaga 874-1960* 1961, p.394)で最高傑作と評した『盲人の闘い』(*Hernaðarsaga blinda mannsins* 1941)は、目の不自由な舅と嫁の家庭内の葛藤を醜い現実から目をそむけずに扱ったものである。1956年には、前述のオウラヴル・ヨウハン・シーグルソンの編集によるそれまでの短編のアンソロジー『16の物語』(*Sextán sögur*)が刊行された。『暗い謎文字』(*Blakkar rúnir* 1962)に至る全5巻の短編集は、近現代アイスランド文学叢書ストウルボウク(*Stórbók*)の1巻(1989)に、全著作目録とともに収められている。ハルドウルはまた、多数の個性的な翻訳を残した。ゴーリキーの『母』、ルーマニアの文豪スタンク(Zaharia Stancu 1902～74)の『はだしのダリエ』をはじめ、魯迅やジャック・ロンドンの翻訳もある。

9.10. エイナル・クリスティヤウンソン — 社会主義思想の短編小説家

エイナル・クリスティヤウンソン(Einar Kristjánsson 1911～96)は北西部の北シングエイヤルシスラ(Norður-Þingeyjarsýsla)、システィルフィエルズル(Þistilfjörður)のヘルムンダルフェトル(Hermundarfell)の農家に生まれた。1932～33年に西部のレイクホルト(Reykholt)の寄宿舎学校を経て、33～43年に同じく西部のクヴァンネイリ(Hvanneyri)の農業学校に学び、36年から10年間、故郷とその周辺で農業を営んだ。46年からは北部の中心地アークルエイリ(Akureyri)に移り、翌年から小学校の校長を務めた。

エイナルは左翼系の社会主義思想の持ち主であり、辛辣なユーモアを交え

て小市民の日常生活と運命を描き出すのを得意とした。短編小説が多く、1952年の短編集『9月の日々』(Septemberdagar)を皮切りに、数巻の短編集を刊行した。戯曲も残している。

10. 第二次大戦前後の叙情詩——現代詩への革新——

10.1. 現代詩への革新の動き

第一次大戦後、表現主義と超現実主義の波に洗われたアイスランド叙情詩は、前述のように散文文学に主導的地位を譲った。叙情詩が新たな歩みを踏み出したのは、世界恐慌の不安が社会に蔓延した後、一転して第二次大戦前夜の好景気に沸き始める1930年代半ばのことである。とくに1930年は新旧の波が拮抗する記念すべき年となった。旧世代の代弁者は、新ロマン派象徴詩の巨匠エイナル・バーネディフツソンの最後の詩集、それにエイナルとともにアルシング創立千年祭の祝祭詩で第1位を得た民衆詩の国民詩人ダーヴィズ・ステーファウンソンの作品である。新世代を代表するのは、牧師で神学者のシーグルズル・エイナルソン(Sigurður Einarsson 1898~1967)の詩集『槌と鎌』(*Hamar og sigð* 1930)とハルドウル・ラハスネスの数少ない詩集『小詩集』(*Kvæðakver* 1930)で、ともに政治的色彩を帯び、共産主義的性格を濃厚に示していた。

文学の政治化が顕著となる中で、叙情詩の内容的・形式的革新が追及されていった。ただし、形式面での革新にはなお時間を要した。とくに頭韻の廃止には大きな抵抗があり、第二次大戦後の50年代にようやく広まった。

10.2. 雑誌『赤いペン』の創刊とクリスティンE. アンドリエソン

アイスランド叙情詩が現代詩に脱皮する過程で重要な役割を演じたのは、先駆者と言うべきステイトン・ステイナルを中心として、その前後に活躍したほとんど20世紀生まれの詩人たちである。これにはステイトンも関与した文芸誌『赤いペン』(*Rauðir pennar* 1935~38)の存在が大きい。同誌は文

芸評論家で政治家のクリスティン E. (=エイヨウルヴル) アンドリエソン (Kristinn E. (=Eyjólfur) Andrússon 1901~73) の主導で創刊された。クリスティンは 1934 年に著名な出版社「ヘイムスクリングラ」(Heimskringla) を創立し、37 年には今日の代表的な出版社でアイスランド最大の書店でもある「マウル・オグ・メンニング」(Mál og menning) —「言語と文化」の意味— に発展させた。社会主義政党の国会議員を務めた経験もある。現代文学の振興に多方面で尽力し、『現代アイスランド文学 1918~1948』(*Íslenzkar nútímabókmenntir 1918-1948* 1949) など著作も多く、晩年まで文芸批評に健筆を振るった。『赤いペン』には当時、共産主義に転じていたハルドウル・ラハスネスをはじめ、前述のオウラヴル・ヨウハン・シーグルソンや後述するステーファウン・ヨウンソンも加わった。同誌は年 1 回の発行で 4 巻が出たに過ぎなかった。しかし、クリスティンの主導でハルドウル・ラハスネス、ソウルベルグル・ソウルザルソン、ハルドウル・ステーファウンソンらの賛同を得て、今日まで続いている季刊文芸誌『言語文化雑誌』(*Tímarit Máls og menningar* 1938~, www.tmm.is) に引き継がれた。クリスティンは 30 年間、同誌の編集に従事した。

以下では、『赤いペン』に関与したステイトン・ステイナル以外の革新的な合計 3 人の詩人に加えて、ロマン派的伝統を尊重しつつ、新しい形式美を開拓したスノッリ・ヒャルタルソンとその後継者とも評されるハンネス・ピエートルソンについて解説しよう。

10.3. 『赤いペン』とその周辺の詩人たち

『赤いペン』の創刊者のひとり、ヨウハネス・ウール・ケヘトルム (Jóhannes úr Kötlum 1899~1972) は北西部の出身で、幼年時代を過ごした土地の川に注ぐ複数のカハトラル (Katlar) の滝にちなんで「ウール・ケヘトルム」(=カハトラル出身の) と自称した。1921 年以来、学校教師を務め、ステイトン・ステイナルの恩師でもある。32 年以降はレイキャヴィークに転勤し、同地とその周辺で暮らした。きわめて多作の詩人で、詩集は 1925~70 年の長期間に子供向きの 5 巻を含めて 20 巻を数える。作品群は初期の国民主義的性格の強

いロマン派的作品から一転して、30年代の経済危機を経験してマルクス主義の性格を強く示すようになった中期の作品を経て、モダニズムの詩風を追及した後期の作品に及んでいる。これほど作風を変革した詩人は、他に例を見ない。中期の作品には、『私は眠ったふりをしている』(*Ég læt sem ég sofi* 1932)、『それでも私は目覚めていよう』(*Samt mun ég vaka* 1935)から『日は陰る』(*Sól téir sortna* 1945)までが属し、力強さの背後に叙情性は後退した観がある。しかし、前述のロマン派詩人ヨウナス・ハトルグリムソンとマハティアス・ヨホクムソンの有名な詩の一節を題名に取った『樹水色の髪之母』(*Hrímhvítta móðir* 1937)と『永久の小花』(*Eilífðar smáblóm* 1940)では、社会主義的観点から見た祖国の歴史と自然について、情感あふれる親密な描写がなされている。後期の2作『7日間』(*Sjödægra* 1955)と『反詩』(*Óljóð* 1962)は大戦後の混乱期にあつて、伝統的な韻律の放棄など、新しい表現形式を求めた熟年期での野新作である。ヨウハネスは1955年までの10年間、匿名で作品や翻訳詩を発表していた。訳詩集『異国の言葉』(*Annarlegar tungur* 1948)は後述するマグヌス・アウスギェイルソンとは異なり、韻律を捨象した自由な翻訳の試みである。小説家としてもすぐれ、イギリス軍駐在への抗議、19世紀末の北米大陸への移住をつづった3部作など、5編の長編小説を残している。

グヴズムンドゥル・ベズヴァルソン (Guðmundur Böðvarsson 1904~74)は西部の出身で生涯、故郷で農業に従事した。しかし、その詩作品は故郷の狭い枠に縛られず、初期の『太陽の接吻』(*Kyssti mig sól* 1936)から後期の『水底の水晶』(*Kristallinn í hylnum* 1952)に至るまで、大戦前夜から冷戦と核の脅威にさらされた祖国の運命を肌で感じ取り、現代世界について広い問題意識を保った。後述するマグヌス・アウスギェイルソンの訳業から刺激を受けて、ダンテの『神曲』の翻訳(1968)も試みている。

10.4. スノッリ・ヒャルタルソン — 新たな形式美を追求した現代詩人

スノッリ・ヒャルタルソン (Snorri Hjartarson 1906~86)は西部の裕福な家の出身であり、『赤いペン』に関与したわけではない。レイキャヴィーク・

ラテン語学校を経て、コペンハーゲンとオスロの大学で美術を専攻し、表現主義絵画を描いた。ノルウェー滞在中には、芸術家の実生活とのジレンマを扱ったノルウェー語ブークモールによる小説『大鴉は高く舞い上がる』(*Hoit flyver ravn* 1934)を発表している。1936年に帰国した後、レイキャヴィークの市立図書館員を勤めるかたわら詩集を出版した。卓越した文芸評論家、編集者としても広く知られた。作品はそれほど多くなく、独立した詩集は『詩集』(*Kvæði* 1944)、『グニータヘイジにて』(*Á Gnitaheiði* 1952)、『木の葉と星』(*Lauf og stjörnur* 1966)、『私の上に広がる秋の夕暮れ』(*Hauströkkrið yfir mér* 1979)の4巻にとどまるが、評価はすこぶる高い。そこでは年代を追って、完全独立に至った祖国への個人的体験を交えた賛美、大戦後の世界情勢が抱える問題の中で祖国の将来を案じる気持ち、新しい価値観にたいする疎外感と不易流行の精神性への信頼が表現されている。スノッリは処女作の『詩集』において、韻律的技法を駆使したすぐれた形式美の詩を作りながらも、不純韻の多用などの実験的試みや豊富な比喻表現を用いて、新たな可能性を追求していった。同時に、戦後の国際情勢の余波を受けて独立が危ぶまれた時代の社会問題を、祖国の自然と歴史に注意を喚起することで、批判的に表現しようとした。この意味で、ロマン派の国民詩人ヨナス・ハトルグリムソンと比肩されることもある。1981年には前述のオウラヴル・ヨハン・シーグルソンに続いて、「北欧協会文学賞」を受賞した。

10.5. ハンネス・ピェートゥルソン — 自然派で知性派の穏健な現代詩人

ハンネス・ピェートゥルソン (Hannes Pétursson 1931～) は北部のスカガファイヤルザルシスラ (Skagafjarðarsýsla)、セイザウルクロウクル (Sauðárkrókur) に貯蓄銀行の頭取の息子として生まれた。富裕な家の出身で輝かしい学歴の持ち主であり、海外での滞在経験も豊富で社会的地位にも恵まれた人物である。1952年までレイキャヴィークのアイスランド大学で学んだ後、54年までドイツのケルン大学とハイデルベルク大学でドイツ文学を修めた。祖国に戻ると、59年までアイスランド大学でアイスランド文学を専攻した後、レイキャヴィークの文化交流基金 (Menningarsjóður) の出版部門

に勤め、編集者、文学史研究者、文芸批評家として活躍した。

ハンネスは後述する「原子詩人」たちに続く戦後第2世代の代表的な詩人である。1954年のアンソロジー『若い詩人たちの詩 1944～1954』(*Ljóð ungra skálda 1944-1954*)に掲載された作品は、メーリケ、リルケ、ヘッセなど、ドイツ語圏の詩人から影響を受けている。脚韻の代わりに頭韻を駆使し、伝統的詩法に自由な現代性を織り交ぜた形式美あふれるデビュー作『詩集』(*Kvæðabók* 1955)で注目を集め、スノッリ・ヒヤルタルソンの後継者と評された。その後は、現代文明社会における自然や事物の根源からの疎外をテーマとした。詩集は第2作の『夏の谷間にて』(*Í sumardöllum* 1959)以来、数多い。短編集『北の物語』(*Sögur að norðan* 1961)以来、散文作品も少なくない。1959年と61年には国内の文学賞、94年には詩集『炎の深み』(*Eldhyllur*)で「アイスランド文学賞」(*Íslensku Bókmenntaverðlaunin*)を受賞した。リルケの『神さまの話』やカフカの『変身』の翻訳もある。ハンネスは教養人としてアイスランドの文学的伝統を継承し、人間の疎外、孤立化など現代人のかかえる問題を扱った。あくまで調和を理想とし、祖国の自然を熱愛して、その中に現代世界で失われた人間と外界との一体感を求める傾向が見られる。この点で、伝統的な韻律を破棄して急進的な現代詩運動を展開した原子詩人たちとは対照的に、穏健な問題解決を志向した現代詩人として位置づけられる。

現代社会の錯綜から歴史の価値を再認識したハンネスは、文学研究者としてもすぐれ、ロマン派詩人のステイングリームル・トルステインソンの伝記やヨウナス・ハトルグリムソンの研究書を著わしている。ヨーロッパ紀行『旅に夢中』(*Á faraldsfæti* 1967)やフェーロー諸島紀行『18の島』(*Eyjarnar átján* 1967)なども手掛けた。本書の執筆で座右に置いた『アイスランド作家便覧 a-l/m-ö』(*Íslenskt skáldatal a-l/m-ö* 1973/76)も、ハンネスらの編纂による。

ハンネスと詩風を共有する同世代の詩人には、マハティアス・ヨウハネセン(Matthías Johanessen 1930～)、ソルステイトン・フラウ・ハムリ(Porsteinn frá Hamri 1938～)などがある。このような作風の戦後第2世代

の詩人たちは、70年代までにアイスランドの歴史と文化遺産との関係を重視する方向に転じ、日常会話に近い言語表現で詩作を試みていった。

10.6. ヨウン・ウール・ヴェール — 詩形式の革新を実践した生活詩人

ヨウン・ウール・ヴェール (Jón úr Vör 1917~2000) は北西部の険しい自然で知られる西フィヨルド地方 (Vestfirðir), (西) バルザストランドルシスラ ((Vestur-) Barðastrandarsýsla) の最西端に位置するパートレヘスフィエルズル (Patreksfjörður) のヴァハトネイリ (Vatneyri) で貧しい靴職人の家に生まれた (vör は「波止場」の意味)。14人兄弟の7番目だったヨウンは知人の漁師のもとに預けられ、6人の腹違いの兄弟とともに育った。古来、アイスランドでは漁業は冬の間の季節労働であり、いわゆる漁村はおもに19世紀以降に発達した。ヨウンの作品には、里子に出された故郷の猟師の家庭での生活体験が色濃く投影されているものが多い。1935年にレイキャヴィークに出ると、クリスティンE.アンドリエソンと知り合い、同年、18歳で『赤いペン』に処女作の詩を発表した。ヘイムスクリングラ書店の店員となり、20歳で社会主義的叙情詩の性格が強い処女詩集『私はドアをノックする』(*Ég ber að dyrum* 1937) を出版して好評を得た。表題作の詩は、花屋の集金係りを勤めた体験をいっさい韻律を用いずに、虚飾さを排して率直に語ったものである。

38年にはスウェーデンに渡り、スウェーデン文学に親しんだ。とくに影響を受けたのは同時代のスウェーデンの詩人たちからだが、いわゆる「40年代派」(ス *fyrtiotalisterna*) の急進的な詩人たちよりも、むしろその先駆者のプロレタリア詩人たちに感化された。なかでも、74年にノーベル文学賞を受賞したハッリュ・マッティンソン (Harry Martinsson 1904~78) とは共感するところが大きかった。マッティンソンはオペラにもなった代表作『アニアラ』(ス *Aniara* 1956) などの詩作品のほかに、苦難の生い立ちを美しい叙情的な文体でつづった『棘草の花咲く』(ス *Nässlorna blomma* 1935) などの自伝的小説でも名高い。ヨウンは第二次大戦の勃発とともに帰国したが、終戦後の45年から2年間、再びスウェーデンで過ごした。その後は書籍の編

集・出版業を経て、レイキャヴィークに隣接するコウパヴォーグル (Kópavogur) で図書館を設立し、その運営に努めた。

広く注目を集めたのは、スウェーデン滞在中に書き上げた3冊目の詩集『村』(Þorpið 1946)による。これはアイスランド叙情詩で初めて脚韻と組織的な頭韻、均一な詩行の連続による構成をいずれも捨て、散文詩を思わせる斬新なスタイルの作品だけから成る詩集である。20世紀初頭までの気品高いリリズムを破り、賛否両論の反響を呼んだ。内容は故郷の西フィヨルド地方の漁村での生い立ちと生活描写であり、日常的な言い回しによる朴訥^{ぼくとつ}で簡潔な表現に貫かれている。大戦間の困難な時代の貧困と過酷な労働を写実的にうたっているが、イデオロギー的思い入れは希薄で、ロマン派の情緒すら感じさせる。2人称親称単数のþú「おまえ」に呼びかける形式を取り、作者の幼年時代を想起させるが、不思議に読者自身の記憶と重なるかのような共感呼び起こす。『村』は56年に大幅な増補版が出版された。

次の詩集『頭韻を用いて』(Með hljóðstaf 1951)は『村』に収録されなかった作品を集めたもので、再び伝統的な韻律に回帰した。日々の慎ましい生活の価値を飾らずに言葉にすることを信条としたヨウンの作風は、『冬の鷗』^{かもめ}(Vetrarmávar 1960)などにも受け継がれた。後年の作品では懐疑主義とペシミズムを深めていった。ヨウンの作品はステイトン・ステイナルのように読者を当惑させる表現上の斬新さとは無縁であり、形式的側面でそれ以降の現代詩への刺激となった。

それでは次に、詩集『村』から『真冬の日々』を紹介しよう。

真冬の日々 ヨウン・ウール・ヴェール
(Útmánuðir Jón úr Vör)

おまえは覚えているか あの長い
 ミルクの尽きた真冬の日々のことを
 深まる冬に備えた小魚の残り
 バケツの水で塩抜きした干物

井戸端

跳ね返る水音の単調な響き

粗麻の布を被せて

倉庫に寝かせた漁船

岸边に集まる羊の群れ

凍^{こご}える足

果てることを知らない長い夜

辛抱の限りを尽くしてたびたび待ちわびた

空^{から}の鍋汁を満たすはずの

漁の収穫

Og manstu hin löngu,

mjólkurlausu miðsvetrardægur,

útmánaðatrosið,

bútung, sem afvatnast í skjólu,

brunnhús

og bununnar einfalda söng,

báta í nausti

og breitt yfir striga,

kindur í fjöru,

og kalda fætur,

og kvöldin löng eins og eilífðin sjálf,

oft var þá með óþreyju beðið

eftir gæftum

og nýju í söðið.

おまえは覚えているか

ある日の夕暮れ

おまえは里親の母と岸边に立ち

凍りついた^{ふなひき}船曳のローラーを不安げに見つめ
フィヨルドの彼方を眺めて
空を仰いだ —
しかし 岬に戻るはずの小船の姿を待つも
その気配はなく
嵐の唸り^{うな}とともにあたりは闇に包まれ
無言のまま
枕は涙に濡れ
広すぎるベッドで寂しく眠りに落ちた

Og manstu

eitt kvöld undir rökkur.
Þú stóðst í fjöru með fósturu þinni.
Þið horfðuð með ugg á frosna hlunna,
út á fjörðinn,
til himins, —
þið áttuð von á litlum báti fyrir eyrarodda,
en hann kom ekki.
Og rökkrið varð að þungu myrkri með veðurhljóði,
þögn
og tárur í koddá,
og þú sofnaðir einsamall í of stóru rúmi.

おまえは覚えているか

真夜中になってからの喜びを
硬く鍛えられた手のひらが
頭の上に置かれ
頬を柔らかな^{ぬく}温い手の甲で^{さす}擦られて
おまえは目を覚ました

里親の父が帰って来たのだ
— 両手で首にすがりつくおまえにキスをくれ
海の匂いで湿った髭ひげに冷気の残りを覚えた

Og manstu

gleði þína á miðri nóttu,
er þú vaknaðir við, að á koll þinn
var lagður vinnuharður lófi
og um vanga þinn
strokið mjúku og hlýju handarbaki.

Fóstri þinn var kominn

— og kyssti þig, er þú lagðir hendur um háls hans.
Og það var enn kul í sjóvotu yfirskegginu.

翌朝 青みを帯びた鮮魚が
霜のこびりついたまな板に並び
日の光が銀色のタラの鱗うろこを照らして —
貧しい者の家に幸せが訪れたのを

Og næsta morgun var blár steinbítur
á héluðum hlaðvarpasteini,
og sól sindraði í silfri ýsuhreisturs, —
og hamingja í húsi fátæks manns.

10.7. 第二次大戦後の詩人たち

現代文学および現代芸術一般をめぐる論争と実際の試みは、アイスランドでも他の北歐諸国と同時期の1940～50年代に広く行われた。しかし、叙情詩の形式にかんしては、これまで述べてきたように、他の北歐諸国よりも伝統への依存度が高かった。それを破ることは、異質な上層文化の傘下に身を落

とすかのような印象を与えたのである。上述の『赤いペン』を中心とする詩人たちも部分的にはこれを試みており、とくにヨウン・ウール・ヴェールの詩集『村』は画期的だった。晩年のステイトン・ステイナルも1950年に総合芸術誌『人生と芸術』(Líf og list 1950～53)に掲載したエッセイの中で、「伝統的な詩形はもはや死んだ」と宣言している。しかし、ステイトン自身の功績はおもに内容面で現代詩への道を開拓した点にあった。ステイトンの現代性を受け継いで、それを「詩形式の革命」(formbylting)と呼ばれる頭韻を含む伝統的な韻律を完全に放棄し、新しい皮袋に盛る試みは、次の世代を待つことになった。

10.8. 「原子詩人」たち

第二次大戦後まもなく、まったく新しい世代の詩人たちがアイスランドの文壇を彩ることになった。1950年前後に20代前半から30代前半でデビューした若者たちで、統一的なグループを形成したわけではない。ただ、戦後の社会変動を強く意識し、現代詩としての急進的革新を求めた点で共通している。この新世代の旗手たちは「原子詩人」(atómskáld)と呼ばれる。この名称は、ハルドウル・ラハスネスの小説『原爆基地』に登場する架空の詩人による風刺詩の一節に由来する。新時代の到来にちなむ世界創造の託宣として披露された「オウ、タータ ポンマ、トンバ アータ マンマ、オウ トンマ アート」(ó tata bomma, tomba ata mamma, ó tomma at)というナンセンスな文句がそれで、「原子爆弾」を新約聖書のコイナー口調でもじったものである。当時の保守的な批評家たちは、新世代詩人の作品を取るに足りないと揶揄する目的で、これを「原始的な詩」という意味で援用した(正式には「原子爆弾」はkjarnorkusprengjaという新造語で表現する)。その作品は素人芸で理解不能であり、外国詩の模倣にすぎず、退廃的で、文学的伝統を断ち切る悪影響を及ぼすと酷評したのである。ところが、新世代の詩人たちは自分たちのアイデンティティを示すレッテルとして、逆に自らそう名乗るようになった。「原子詩人」という名称には、核時代の脅威にたいする問題意識と詩的革新への自負が込められている。原子詩人の難解さとその作品への

拒絶反応は、現実世界の具体的メッセージの伝達に代わって、内向的なイメージとメタファーの多用、田園や山野の風景に代わって、車、ビル、騒音にあふれる都市の生活、社会的・政治的現実との葛藤など、伝統的な安定した心理的快感と美的カノンからの逸脱に起因するところが大きい。これは広く現代芸術に共通する特徴である。時の経過とともに、原子詩人たちによる純粹な表現行為と詩的言語の眞摯な探求心^{しんし}にたいして、人々は徐々に穏やかな装いを感じ取るようになっていった。

アイスランド現代詩の本格的革新への動きは、次の3人の原子詩人の詩集が相次いで現れた1951年に訪れた。

まず、ハンネス・シフフソン (Hannes Sigfússon 1922~97) は同年に2作目の『四季大斎日』(*Imbrudagar* 1951)を刊行した。T.S. エリオット、スウェーデンのグンナル・エーケレーヴ (Gunnar Ekelöf 1907~68) と前述の急進的な「40年代派」の詩人たちからの影響が強い。難解な詩人として知られ、処女作『受難週の夜警』(*Dymbilvaka* 1949) など、カトリックの儀式にちなむ題名を冠した作品では、内向的な情緒が陰鬱なメタファーに乗せて個性的で複雑な文体で表現されている。さまざまな職を経て、1963~88年にノルウェーで暮らし、南海岸のスタヴァンゲル(Stavanger)の図書館員を務めた。外国文学の翻訳者としても知られ、北歐諸国の現代詩の翻訳と解説を添えた『北歐詩集 1939~1969』(*Norræn ljóð 1939-1969* 1972)などを著している。

シフフス・ダーザソン (Sigfús Daðason 1928~96) の処女作『1947~1951年の詩』(*Ljóð 1947-1951* 1951)も同年に世に出た。1959年にパリ大学で文学の学位を得た知性派で、フランス現代詩の影響を受けている。ハンネスと同様にメタファーを多用し、乾いた理知的な作風の難解な詩人として知られている。現代世界での人間の存在と時代批判をテーマとした詩集『手と言葉』(*Hendur og orð* 1959)も名高い。前述の『言語文化雑誌』の編集員を務め、60年以降は前述の出版社・書店マウル・オグ・メンニングに勤務した。ロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』など、翻訳も多い。

ステーファウン・ヘルズル・グリムソン (Stefán Hörður Grímsson 1919~2002) の2作目『黒い天使の舞』(*Svartálfadans* 1951)も同年に現れた。

処女作では伝統的な形式を踏襲していたが、2作目から形式の革新を実践し、作品としての自立性を追及した。ステイトン・ステイナルから強く影響を受け、その継承者とも言われる。生業は農業と漁業で、後年は自然保護にも尽力した。1990年に詩集『ある晴れた朝に』(*Yfir heiðan morgun* 1989)で第1回目の「アイスランド文学賞」を受賞した。

以上の3人に、次の2人を加えた5人が原子詩人の主要メンバーである。2人ともアイスランドの自然を好んで取り上げたが、その美しさや偉大さを称えたロマン派の詩とは異なり、自然を人間の生活基盤ととらえ、社会生活と政治状況に結びつけた内容が特徴的である。

まず、ヨウン・オウスカル(*Jón Óskar* 1921~98)はレイキャヴィークの音楽学校に学び、ピアノ演奏も巧みだった。2冊目の詩集『夜は我らの肩の上に』(*Nóttin á herðum okkar* 1958)は音楽的文体とも形容されて名高い。愛情をテーマとした作品が多く、おおむね具体的に比較的理解しやすい。短編集や長編小説も残した。フランス文学に造詣が深く、フランス詩のアンソロジー『フランス詩集』(*Ljóðapýðingar úr frönsku* 1963)やカミュの『ペスト』など、翻訳も数多い。後述する文芸誌『ビルティングル』の編集員も務めた。

エイナル・ブライイ(*Einar Bragi* 1921~2005)は実科学校の教師で、スウェーデンのルンドとストックホルムの両大学に留学した経験もある。同地ではハンネス・シフフソンと同様に「40年代派」の詩人たちから影響を受けた。文芸誌『ビルティングル』(*Birtingur*, 「純真」の意味 1953~68)を創刊し、初代編集員を務めた。同誌の題名は18世紀フランスの啓蒙思想家ヴォルテールの小説『カンディード』(*Candide* 1759)の訳語による。55年以降、他の原子詩人たちや後述するトウル・ヴィルヒャウルムソンも加わって、前衛的な現代文学を紹介する重要な雑誌となった。エイナルは旧作の詩に改訂を重ね、繰り返し出版したことで知られる。ハンネス・シフフソンと並んで北欧詩の翻訳を残したが、とくにグリーンランド、フェーロー諸島、サーミといったマイナーな地域の人々の作品を数多く紹介した。

ちなみに、後述する小説家エーリアス・マールとトウル・ヴィルヒャウル

ムソンも、初期には原子詩人の系列に属する詩作品を発表していた。

10.9. ステイトン・ステイナル — アイスランド現代詩の開拓者

ステイトン・ステイナル (Steinn Steinarr 1908~58) は北西部の険しい自然で知られる西フィヨルド地方、イーサフィヤルザルシスラ (Ísafjarðarsýsla) のレイガランド (Laugaland) の農家に生まれた。本名をアーザルステイトン・クリストムンソン (Aðalsteinn Kristmundsson) という。幼少期に両親が離婚し、4人の子供を連れた母親とともに、前述の新ロマン派詩人ステーファウン・フラウ・クヴィータダールの住む農場に移った。ステーファウンに加えて、2年間、学校で教えを受けた前述の詩人ヨウハネス・ウール・ケヘトルムのもとで天性の詩才を伸ばす機会を得た。このほかに影響を受けた同時代の詩人には、最初の「都市の詩人」と言われた新ロマン派のトウマス・グヴズムンソンがいる。アーザルステイトンも20才でレイキャヴィークに出て、最初の「都市のプロレタリアート詩人」と言われた。

当時のレイキャヴィークは世界恐慌の余波に見舞われた時期と重なり、不景気と社会不安が蔓延していた。病弱で片腕が不自由だったアーザルステイトンは定職に就けず、臨時のアルバイトで飢えをしのぎながら、放浪者的な生活を送ることを余儀なくされた。『赤いペン』のグループに交わり、共産主義思想に傾いたのは当然の成り行きと言える。1930年頃には「ステイトン・ステイナル」のペンネームを使い始めた。「石」(steinn)を連想させるこの筆名は、傷つきやすい内面を固く守り、失望と反動を経験しつつも、自らの理念を追求する決意を込めたものであろう。初の詩集『炎は赤く燃え』(*Rauður loginn brann* 1934)は『赤いペン』のグループの同胞たちに捧げたもので、伝統的な韻文形式を取り、ブルジョワ社会への批判を込めた共産主義の理念的性格が強い。

しかし、ステイトンはまもなく共産主義の信条を疑い、政治的関心から距離を置く立場に転じて、自己と世界に懐疑的な目を向け始めた。2冊目の『詩集』(*Ljóð* 1938)では一転して社会性が薄れ、実存主義の影響とニヒリズム

が濃厚に現れている。伝統的な韻律を捨てた自由詩の形式を取り、存在の孤独と人生の肯定の感情が大胆な比喩表現の中で交差するこの詩集は、アイスランド現代詩の先駆けとなった。神の存在を信じず、目標を失った現代世界に置かれた人間の心的風景を吐露したこの詩集は、19世紀以来、祖国愛と独立運動、社会批判と反骨精神で苦難の時代を乗り切り、未来を切り開いてきたアイスランド国民にとって、大きなショックだった。同様の立場は、第3冊『砂地の足跡』(*Spor í sandi* 1940)と第4冊『果てのない旅』(*Ferð án fyrirheits* 1942)でも継承された。韻律の使用を復活した点も注目に値する。両者はある程度多くの読者の共感を得ることに成功した。

10.10. マグヌス・アウスゲイルソン — 翻訳詩の巨匠

第二次大戦後、ステイトンはスカンジナビア、イギリス、フランスを旅行し、視野を広める機会を得た。ステイトンは外国語の素養は乏しかったが、若いころから翻訳を通じて、北欧詩人のほかにフランスのP. エリュアール、スペインのG. ロルカ、イギリスのT.S. エリオット、E. パウンド、W.B. イェーツなど、ヨーロッパ近現代詩に精通していた。それにはマグヌス・アウスゲイルソン (Magnús Ásgeirsson 1901~55) による翻訳が大きく貢献した。終生、図書館員として勤めたマグヌスはスウェーデン最大の詩人グスタフ・フレージング (Gustaf Fröding 1860~1911)、戦争報道記者としてベルリン空襲に参加して命を落としたノルウェーのノルダール・グリーグ (Nordahl Grieg 1902~43) など、北欧詩人を中心に15か国、100人以上の詩人の作品をアイスランド詩の技法を駆使した名訳を通して紹介した。その範囲はゲーテ、ハイネ、オスカー・ワイルドから11~12世紀のペルシャの詩人オマル・ハイヤームの『ルバイヤート』にまで及んでいる。パール・バックの『大地』、トルストイの『アンナ・カレーニナ』など小説の翻訳も多く、自らも新ロマン派詩人として青年時代に詩集を残し、トウマス・グヴズムンソンとともに雑誌の編集も手がけた。マグヌスは前述のロマン派詩人・教育者ステイングリームル・トルステインソンに続く最大の海外文学の紹介者であり、同時代の詩人たちの創作意欲を内側から鼓舞した。グヴズムンドゥル・

ベズヴァルソン, ヨウン・ウール・ヴェールも恩恵を被っている。

10.11. 『時間と水』——ステイトン・ステイナル最後の詩集

大戦後, ステイトンは5冊目の詩集『時間と水』(*Tíminn og vatnið* 1948)を発表した。最後の詩集となったこの作品は, 大胆な実験的試みである。水を時間の象徴とみなす古来の通念を基にした題名を欠く21節の連作で, 各節は簡潔な3行3連の構成を基本に自由なヴァリエーションを見せて展開していく。切り詰めた表現の連続, 現実世界の主観的解体, 論理的脈絡の捨象, 抽象的な比喩表現の横溢^{おういつ}, 対立概念の並置, 象徴的色彩表現の多用などによって, 理解は幾重にも阻まれる。空間と時間, 自己と外界, 思惟^{しゐ}と現実という対立が永遠の静けさの中に止揚されて幕を閉じるが, 全体の解釈は必然的に個々の読者に委ねられる。この有名な作品でステイトンは“A poem should not mean, but be.”(Archibald MacLeish 1892~1982)という姿勢を標榜しつつ, 外界の脅威にさらされた現代世界における人間の存在の意義を神秘的な深みから啓示しようとしたと言えよう。この作品は1948年の発表当時, 13節で構成されていた(1, 3, 6, 7, 10, 14, 5, 18, 16, 17, 12, 15, 21)。配列を変えて21節に拡大されたのは, 56年の改訂版以降である。そのうちの3節(12, 16, 21)は『三つの宗教的な詩』(*Þrjú helgijóð*)と題して, 47年に文芸雑誌『言語芸術と造形芸術』(*Ritlist og myndlist*)にすでに掲載され, 第20節は『沈黙』(*Þögn*)の題名で45年に前述の『言語文化雑誌』に掲載されていた。

注目すべき点は韻律である。ほとんどの節が意味的に重要な語を頭韻によってきわ立たせている。脚韻は節を構成する各連の最後に現れることが多いが, 規則的に踏んでいるわけではない。この作品は発表当時, 読者の戸惑いととも非常に斬新な印象を与えたが, ゲルマン語詩の伝統的な頭韻がアイスランド語では20世紀半ばの現代詩にも生きている事実には, 驚きを禁じ得ない。ステイトンは最終的には詩形式の伝統を払拭せず, 主として内容面で革新を行ったと言える。

それでは次に, 『時間と水』の全文を紹介しよう。

時間と水 ステイトン・ステイナル
(*Tíminn og vatnið* Steinn Steinarr)

1

時間は水のようなだ
水は冷たく 深い
私自身の意識のように

時間は絵のようなだ
水によって そして半ば
私によって描かれた絵

時間と水は
道も無く流れ 枯れゆく
私自身の意識の中へ

2

太陽
太陽は私の^{かたわ}傍らにあった
黄色い靴を履いた
細身の女のように

二〇^{ひろ}尋の深みに
私の信仰と愛は眠っていた
二つ色の花のように

太陽は昇った
無邪気な花の上を
黄色い靴を履いて

1

Tíminn er eins og vatnið,
og vatnið er kalt og djúpt
eins og vitund mín sjálfs.

Og tíminn er eins og mynd,
sem er máluð af vatninu
og mér til hálf.

Og tíminn og vatnið
renna veglaust til þurrðar
inn í vitund mín sjálfs.

2

Sólin,
sólin var hjá mér,
eins og grannvaxin kona,
á gulum skóm.

Í tvítugu djúpi
svaf trú mín og ást
Eins og tvílit blóm.

Og sólin gekk
yfir grunlaust blómið
á gulum skóm.

3

透明な翼をはためかせ
水は跳ね返る
己の抵抗に遭いながら

朱色の糸球は
私の前を過ぎつつ
行く手を見失う

燃える物質の
血に飢えた唇の向こうに
死の花が育つ

円えんすいと円錐くけいの間の
矩形をした平面に
白い死の花が育つ

4

赤銅色の砂浜に
砕け散る波
青色の草の中に
吹き消される風
息絶えた花

私は小石を手に取り
白い壁に放った
音を立てて笑う小石

3

Gagnsæjum vængjum
flýgur vatnið til baka
gegn viðnámi sínu.

Hið rauðgula hnoða,
sem rennur á undan mér,
fylgir engri átt.

Handan blóðþyrstra vara
hins brennandi efnis
vex blóm dauðans.

Á hornréttum fleti
milli hringsins og keilunnar
vex hið hvíta blóm dauðans.

4

Alda, sem brotnar
á eirlitum sandi.
Blær, sem þýtur
í bláu grasi.
Blóm, sem dó.

Ég henti steini
í hvítan múrvegg,
og steinninn hló.

5

真夜中に
海の底深く
流れ落ちる水

おまえの隠れた謎の中に
私の暗く研がれた喜びが
見知らぬ頭文字を刻んだ

私の悲しみは
おまえの浅瀬に反射した
黄色い琥珀こほくのように

6

私はうなだれた首
濃紺の目
そして 白い手でもあった

私の命は静止した
縁に立てられた
丸い硬貨のように

時間は消え去った
白い手の上に
こぼれ落ちる涙のように

7

透明なダイスの群れが
空から私に降り注ぐ

5

Vatn, sem rennur
um rauðanótt
út í hyldjúpt haf.

Í dul þína risti
mín dökkbrýnda gleði
sinn ókunna upphafsstaf.

Og sorg mín glitraði
á grunnsævi þínu
eins og gult raf.

6

Ég var drúpanði höfuð,
ég var dimmblátt auga,
ég var hvít hönd.

Og líf mitt stöð kyrrt
eins og kringlótt smámynt,
sem er reist upp á rönd.

Og tíminn hvarf
eins og tár, sem fellur
á hvíta hönd.

7

Himinninn rignir mér
gangsæjum teningum

落下する大地の上に

yfir hrapandi jörð.

陽炎 輝き

Dagseldur, ljós,

静止した恐れの中で

í kyrrstæðum ótta

天使のように迅速に

gegnum engil hraðans,

ガラスのように

eins og gler.

青い翼をした夜半が

Sofa vængbláar hálfnætur

月を^{ひきし}庇にして眠っている

í þakskeggi mánans,

人間の星たちがやって来る

koma mannstjörnur,

星の人間たちがやって来る

koma stjarnmenn,

眠たげな水たちがやって来る

koma syfjuð vötn.

すべてのものが来る

Kemur allt,

来るものは何も無い

kemur ekkert,

波立つ^{りんこう}燐光に覆われて

gróíð bylgjandi maurildum,

神のように

eins og guð.

神

Guð.

8

8

見えない翼のはためきが

Þytur óséðra vængja

赤い光のように

fer um rökkvaða sál mína

私の暗い魂を巡る

eins og rautt ljós.

今夜 私は眠るだろう

Í nótt mun ég sofa

^{すばる}昴の星座がきらめく空の下

undir sjöstirndum himni

浅瀬のない河口で

við hinn óvæða ós.

おまえの声が
赤い光のように
過去の茂みから湧き起こる間に

Meðan rödd þín flýgur
upp af runni hins liðna
eins og rautt ljós.

9

風を捕らえる網：

9

Net til að veiða vindinn:

虚無の
まばゆい光を浴びて
逃げて行く深海魚の群れ

Flýjandi djúpfiski
hlaðið glæru ljósi
einskis.

四次元の夢の
凹面鏡を携えた
太陽の翼で弧を描く水たち

Sólvængjuð hringvötn
búin holspeglum
fjórviðra drauma.

疑念の
夕べの雪の下で
失われた足跡

Týnd spor
undir kvöldsnjó
efans.

風を捕らえる網：

Net til að veiða vindinn:

たいまつ
松明の網の目をはめ込んだ
眠りの空のように
神が捕らえる

Eins og svefnhiminn
lagður blysmöskvum
veiðir guð.

10

私の意識から
おまえの唇までは
道の無い海

10

Frá vitund minni
til vara þinna
er veglaust haf.

それでも 私の夢は輝いた
密かに命を得た波となって
水底が眠っている間に

En draumur minn glóði
í dulkvikri báru,
meðan djúpið svaf.

私の秘密の悲しみは
おまえのもとを訪れる
遠くの青い海のように

Og falin sorg mín
nær fundi þínum.
eins og firðblátt haf.

11

私の幸せの丸屋根は
川の
遠い悲しみの
白い光で作られたもの

11

Og hvolf þak hamingju minnar
er úr hvítu ljósi
hinnar fjarlægju sorgar
fljótsins.

はかない月明かりが
私の手にまといつく
生成する
べとついた液体のように

Og tunglskin hverfleikans
tollir við hendur mínar
eins og límkenndur vökvi
verðandinnar.

私の目の闇は
柔和な笑みを浮かべて
夕べの
冷たい炎の中に運ばれる

Og myrkur auga míns
berst í mjúkum hlátri
inn í kaldan eld
kvöldsins.

12

血の蹄鉄をつけた馬のように
青い鬘をした私の思いは消える
永遠の裏口を抜けて

12

Eins og blóðjárnaðir hestar
hverfa bláfextar hugsanir mínar
inn um bakdyr eilífðarinnar.

仕留めたばかりの鳥のように
名も無い日々が
私の夜の宿りの上に落ちる

Eins og nýskotnir fuglar
falla nafnlausir dagar
yfir náttstað minn.

青い爪をした手のように
遠方の近隣から
否まれた賛同の声が上がる

Eins og naglblá hönd
rís hin neikvæða játtun
upp úr nálægð fjarlægðarinnar.

川の^{まなこ}眼の中で
生石灰のように
私の顔が眠っている間に

Meðan andlit mitt sefur
eins og óslokkið kalk
í auga fljótsins.

13

燃えるように熱い額に
羽を広げた日々の
青い雨が降り注ぐ

13

Á brennheitt andlit
fellur blátt regn
hinna blævængjuðu daga.

^{うっ}虚ろな思考の中に
名も無い物語のように
夜が訪れる

Inn í hugans neind
kemur nóttin
eins og nafnlaus saga.

存在するものの裸身が
夜と昼にたいして
自らの近さを失う

Og nekt þess, sem er,
týnir nálægð sín sjálfs
út í nætur og daga.

14

^ひ陽の光
嵐
海

14

Sólskinið,
stormurinn,
hafið.

私は緑の砂浜を進んだ
緑の砂浜は
私を一面に取り囲んだ
海の中の海のように

Ég hef gengið í grænum sandinum
og grænn sandurinn
var allt í kring um mig
eins og haf í hafinu.

否

Nei.

いくつも翼をつけた鳥のように
山の中へと
私の手は飛んで行く

Eins og margvængjaður fugl
flýgur hönd mín á brott
inn í fjallið.

私の手は
爆発物のように
山の奥深く沈んで行き
山を爆破する

Og hönd mín sökkur
eins og sprengja
djúpt inn í fjallið,
og sprengir fjallið.

15

長い髪の日々の
白い陽の光の中に
おまえの表情が宿る

15

Í sólhvítu ljósi
hinna síðhærðu daga
býr svipur þinn.

誘惑の青い雨のように
私はおまえの涙が
私の悲しみの上に落ちるのを見る

Eins og tálblátt regn
sé ég tár þín falla
yfir trega minn.

おまえの不在は
初めて
私の両腕の中で眠る

Og fjarlægð þín sefur
í faðmi mínum.
í fyrsta sinn.

16

雪解けの時間の山の下に
私の沈黙が立っていた
伸びた穂のように

私は陽の光がやって来るのを見た
灰色がかった道に沿って
私の思いは陽の光を出迎えた
陽の光は黄色に輝く首をもたげた
水のように青い壁の上に

私は闇が飛び去るのを見た
金属でできた鳥のように
黄土色の私の両手の中から

私の沈黙は
無と全の
重い共鳴に変わった

黒く輝く闇が
金色の翼をつけて
陽の光の中を飛んで行く間に

17

おまえの眠っている^{まぶた}瞼に
私の悲しみの
白い明るさが落ちる

16

Undir þárfjalli tímans,
stóð þögn mín
eins og þroskað ax.

Ég sá sólskinið koma gangandi
eftir gráhvítum veginum,
og hugsun mín gekk til móts við
sólskinið,
og sólskinið teygði ljósgult höfuð sitt
yfir vatnsbláan vegg.

Ég sá myrkrið fljúga
eins og málmgerðan fugl
út úr moldbrúnum höndum mínum.

Og þögn mín breyttist
í þungan samhljóm
einskis og alls.

Meðan gljásvart myrkrið
flaug gullnum vængjum
í gegnum sólskinið.

17

Á sofinn hvarm þinn
fellur hvít birta
harms míns.

道の無い海を越えて
おまえの臉へと
私は思いを放つ

Um hið veglausa haf
læt ég hug minn fljúga
til hvarms þíns.

おまえの幸せが
私の悲しみの
白い明さを担うように

Svo að hamingja þín
beri hvíta birtu
harms míns.

18

深い水の中に潜む
二匹の深紅の魚
白い壁に落ちる
濃紺の影

18

Tveir dumbrauðir fiskar
í djúpu vatni.
Dimmblár skuggi
á hvítum vegg.

山肌の上に広がる
スマイル色の雲

Fjölublátt ský
yfir fjallsins egg.

眠っている大地を越えて
私は白い便りを届けた

Yfir sofandi jörð
hef ég flutt hina hvítu fregn.

私の言葉は
水のように青い水の中に落ちた
春の夜の雨のように

Og orð mín féllu
í ísblátt vatnið
eins og vornæturregn.

19

たど
辿り得ないおまえの足跡に
私の羊毛のように白い夢の
思い描かれた輝きが落ちた

19

Í óræk spor þín
féll ímynduð birta
míns ullhvíta draums.

私はおまえの顔が
逆流する流れの
内側に向かう波に映るのを見た

Ég sá andlit þitt speglast
í innhverfri bylgju
hins öfuga straums.

おまえの表情は
冷えきった影のように
私の眠りと夢の間に流れ込んだ

Og svipur þinn rann
eins og svalkaldur skuggi
milli svefns míns og draums.

20

沈黙は
赤い海のように
私の声の上に流れる

20

Þögnin rennur
eins og rauður sjór
yfir rödd mína.

沈黙は
さび
錆で赤茶けた闇のように
おまえの存在の上に流れる

Þögnin rennur
eins og ryðbrunnið myrkur
yfir reynd þína.

沈黙は
三重の輪になって
自らの沈黙を巡って流れる

Þögnin rennur
í þreföldum hring
kringum þögn sína.

21

流れる水
青く明けゆく朝
音の無い夜

21

Rennandi vatn,
risblár dagur,
raddlaus nótt.

私は^{とわ}永久の時間の
^{まなこ}
眼を半ば閉じて
憩いの床に就いた

Ég hef búið mér hvílu
í hálfloktu auga
eilífðarinnar.

不思議の花のように
なが
永い眠りに落ちてゆく
私の体内から
遠いさまざまな世界が育つ

Eins og furðuleg blóm
vaxa fjarlæggar veraldir
út úr langsvæfum
líkama mínum.

私は闇が金属の輪のように
光の軸を巡って
旋回するのを感じる

Ég finn myrkrið hverfast
eins og málmkynjað hjól
um mündul ljóssins.

私は時間の抵抗が
水の柔らかさを通して
力無く落ちるのを感じる

Ég finn mótspyrnu tímans
falla máttvana
gegnum mýkt vatnsins.

永遠の時間が
まなこ
その眼の中から
私の不可解な夢を見つめている間に

Meðan eilífðin horfir
mínum óræða draumi
úr auga sínu.

『時間と水』を刊行した同年、ステイトンは人生の伴侶に恵まれ、心の支えを得た。しかし、10年後、50歳に満たない年齢で癌のために世を去った。

ステイトンの創作態度は気ままで、紙片に書きつけた詩の断片をくずかごから拾い出して、友人たちがまとめて出版するという具合だったという。当時のアイスランドの若い世代はそのペシミズム、ニヒリズム、神秘主義の色彩の強い作品から大きな感化を受けた。今日でも読者はきわめて多い。生前に発表したエッセイや対談は、『開いた窓辺——ステイトン・ステイナル散文集』(Við opinn glugga. Laust mál eftir Stein Steinarr 1961)として前述のハンネス・ピェートゥルソンの手でまとめられた。スノッリ・ヒャルタルソンもアンソロジー『100題の詩』(100 kvæði 1949)を編んでいる。全集は1964年に『詩集とエッセイ』(Kvæðasafn og greinar)として刊行された。

最後に、2作目の『詩集』から『春』を紹介しよう。ステイトンの少年の

ように純真な感性を示し、ハルドウル・ラハスネスが形容したように、一幅の絵を思わせる小品である。

春 ステイトン・ステイナル
(Vor Steinn Steinarr)

黄土色をした鳥が二羽 Tveir gulbrúnir fuglar
薄青色の荒れ野を飛び交い flugu yfir bláhvíta auðnina.

震える小花が二輪 Tvö örlítil titrandi blóm
黒い土塊つちくれの中から teygðu rauðgul höfuð sín
朱色の首をもたげ upp úr svartri moldinni.

青白い顔のみすぼらしい子供が二人 Tvö fölleit, fátækleg börn
岸辺の砂利道を手に手を取り leiddust út hrjóstruga ströndina
震えるような日射ひざしに向かって og hvísluðu í feiminni undrun
おびえたように驚きながらつぶやく út í flöktandi ljósið:
春だ 春だ! Vor, vor!

11. 新しい文学の波 —— 現代文学の諸相 ——

11.1 第二次大戦後の政治批判と文学 —— 国際情勢の社会的影響

第二次大戦後の散文文学で繰り返しテーマとなったのは、1944年の完全独立達成前後のイギリス軍とアメリカ軍による進駐、49年の北大西洋条約機構(NATO)への加盟という政治的事件の経済的・社会的影響である。未曾有みぞうの好景気で国民生活が向上した反面、独立を危ぶむ声が高まり、道徳の荒廃が進んだ。政治家たちがアイスランドを他国に売却するという噂うわさが飛び、アメリカ兵との間に生まれた私生児も稀ではなかった。海外の批評家には過剰と

も書いたこの反応は、長期間の他国支配を経験したアイスランド人の切実な思いに依拠していた。エーリアス・マール (Elías Mar 1924～2007) も小説『子守歌』(Vögguvísa 1950), 『ソウレイの物語 I-II』(Sóleyjarsaga I-II 1954～59) の中で、大戦景気による若者の道徳心の欠如を描いた。後者はアメリカ兵と関係を持ったアイスランドの少女をめぐる悲劇の物語である。ヨウハネス・ヘルギ (Jóhannes Helgi 1926～2001) の『黒ミサ』(Svört messa 1965), インギマル・エルトレンドゥル・シーグルソン (Ingimar Erlendur Sigurðsson 1933～) の『都会の生活』(Borgarlíf 1965) も同類の小説である。

11.2. 語りの伝統の継承 — インドリージ G. ソルステインソンとその周辺

インドリージ G. (=グヴズムンドゥル) ソルステインソン (Indriði G. (=Guðmundur) Þorsteinsson 1926～2000) も『79 番タクシー発車』(Sjöttu og níu af stöðinni 1955), 『戦争の北側』(Norðan við stríð 1971) などの小説で同様のテーマを掘り下げた。前者はケプラヴィークのアメリカ兵と関係を持った孤独な人妻と恋に落ち、故郷への逃亡の途中で事故死に至る田舎出身のタクシー運転手の物語である。好評を得て映画化され、北欧諸国で上映された。『田舎と息子たち』(Land og synir 1963), 北部の農場での羊泥棒をめぐる『天国の泥棒』(Þjófur í paradís 1967) などの小説では、都市に移住した人々の苦労と伝統的生活様式の崩壊がテーマになっている。短編にも短編集『人々の集い』(Mannþing 1965) をはじめ、傑作が多い。一般にインドリージの作品には、ヘミングウェイを思わせるハードボイルドな官能性と土臭い庶民性が漂っている。故郷への愛着と伝統の再認識を示す点では、前述のハネス・ピェートゥルソンとの共通点も感じさせる。

同様の傾向は、ソルギェイル・ソルギェイルソン (Þorgeir Þorgeirsson 1933～2003) の小説『平凡な人々』(Kvinnudagsfólk 1974), トリッグヴィ・エーミルソン (Tryggvi Emilsson 1902～93) の自伝的回想『貧しい人々』(Fátækt fólk 1976) にもうかがわれる。インドリージを中心とするこうした作家たちは、伝統的な叙事的・自然主義的小説技法という皮袋に新時代のモチーフを盛った。

11.3. 現代小説の探求 — トウル・ヴィルヒャウルムソンとその後

前述のソウルベルグル・ソウルザルソンの試みを継承し、伝統的な語りの形式を破った文体で実験的な小説を手掛ける作家も現れた。スコットランドのエジンバラに生まれたトウル・ヴィルヒャウルムソン (Thor Vilhjálmsson 1925～) がその旗手である。カフカとフランスの実存主義の影響を受けて1950年に発表した『人間はいつも独り』 (*Maðurinn er alltaf einn*) は、60の短いテキストの集合から成り、斬新な散文文学の可能性を示すとして高く評価された。その後も短編集『水滴の鏡に映った顔』 (*Andlit í spegli dropans* 1957) など、時間と空間と登場人物の関係を解体する意欲作が続いた。アイスランド大学卒業後、イギリスのノッティンガム大学とフランスのソルボンヌ大学に学び、南欧を中心とする観光ガイドとしてもキャリアを積んだトウルは、エイナル・ベーネディフツソン、ヨウン・スヴェインソン、ハルドウル・ラハスネスなどと並ぶ大旅行家であり、南欧を舞台とした作品が多い。55年には前述の原子詩人エイナル・ブライイを支援して、ヨウン・オウスカルなどとともに入芸誌『ビルティングル』を継承し、68年まで編集に従事した。

60年代の末以降は、T.S. エリオットの作品から題名を取った『早く、早くと鳥は言った』 (*Fljótt fljótt sagði fuglinn* 1968)、『テントウムシの叫び』 (*Óþbjöllunnar* 1970) などの作品で、モンタージュ写真を想起させる視覚的描写の連続による叙情詩のような小説技法を開拓した。この点で、トウルは後述するグヴズベルグル・ベルフソンとともに前衛的なヌーヴォーロマン (nouveau roman) の開拓者として位置づけられる。88年には小説『灰色の苔が燃える』 (*Grámosinn glóir* 1986) によって、オウラヴル・ヨウハン・シーグルソン、スノッリ・ヒャルタルソンに続く3人目のアイスランド人作家として「北欧協会文学賞」を受賞した。99年には『麦藁の中の朝のわらべ歌』 (*Morgunþula í stráum* 1998) によって「アイスランド文学賞」を贈られている。この2作は、南欧を舞台とした初期の作品とは異なって、アイスランドの歴史に題材を得ている。前者は19世紀末の北部の農場での近親姦姦と嬰児殺し、後者は13世紀の大作『ストゥルトルンガルのサガ』 ([ストゥルルン

ガルのサガ], *Sturlunga saga*) をもとに, ストゥルトラ・シフクヴァツソン ([ストゥラ・シグフヴァツソン], *Sturla Sighvatsson*) のローマ巡礼を内面的に深化させて描いた作品である。

このほかにも, トウルは『ヴィーシル新聞』(*Dagblaðið Vísir*) が1979年から授与している「DV文化賞」(*Menningarverðlaun DV*) を84年と87年に受賞した。84年の受賞はフランスの作家アンドレ・マルローの『人間の条件』のアイスランド語訳による。98年にはフランス政府からレジオンドヌール勲章(*Légion d'honneur*)を贈られた。「アイスランド作家協会」(*Rithöfundasamband Íslands*) 会長(1959~60, 66~68), 「アイスランド芸術家協会」(*Bandalag íslenskra listamanna*) 会長(1975~81), 21世紀初頭には「国際ペンクラブ」(*International PEN*) のアイスランド代表も歴任した。戦後の政治状況への批判を根源としたトウルの新しい小説形式の試みは, ヤーコビナ・シーグルザルドウフティル, スヴァーヴァ・ヤーコブスドウフティル, グヴズベルグル・ベルフソン, 後期のハルドウル・ラハスネスなどの賛同を得て開拓されていった。

戯曲については1950年に念願の国立劇場(*Þjóðleikhúsið*)が完成し, 舞台芸術への関心が飛躍的に高まった。しかし, 創作戯曲は他の文芸ジャンルに比べて, すぐには発展を見せなかった。海外の戯曲作品も翻訳され, 上演・放送されたが, 書籍として刊行されるのは稀だった。それでも, 60年代に一時的に戯曲に転じたハルドウル・ラハスネスのほか, アグナル・ソウルザルソン(*Agnar Þórðarson* 1917~2006), オッドウル・ビエルトンソン(*Oddur Björnsson* 1932~), イェクトル・ヤーコブソン(*Jökull Jakobsson* 1933~78)のような逸材による不条理演劇を含む秀作が生まれ, 新しい時代につながっていった。

80年代以降の動向は詳述できないが, 散文文学では語りの伝統の再生を望む読者の声の高まりに呼応して, 「新自然主義」(*nýraunsæi*) と呼ばれる作家たちが台頭を見せている。男性作家としては, ヴィエステイトン・ルズヴィフソン(*Vésteinn Lúðvíksson* 1944~), オウラヴル・ヘイクル・シーモナルソン(*Ólafur Haukur Símonarson* 1947~)などがその旗手たちである。さ

らに新しい世代では、エイナル・カウラソン (Einar Kárason 1955～)、ギルジル・エーリアソン (Gyrðir Elíasson 1961～)、エイナル・マウル・グヴズムンソン (Einar Már Guðmundsson 1954～)、シヨウン (=シーグルヨウン B.(=ビルギル)シーグルソン) (Sjón (=Sigurjón B. (=Birgir) Sigurðsson 1962～) を筆頭に、才能ある作家たちが数多い。エイナルとシヨウンは女性作家フリーザ・シーグルザルドウフティルに続いて、それぞれ 1995 年と 2005 年に 5 人目と 6 人目のアイスランド人作家として「北欧協会文学賞」を受賞している。とくにシヨウンは女性人気歌手ビェルク・グヴズムンスドウフティル (Björk Guðmundsdóttir 1965～) の歌の作詞を担当していることでも知られ、ポップカルチャーの先頭にも立つ逸材である。

11.4. グヴズベルグル・ベルフソン — 現代小説の代表者

グヴズベルグル・ベルフソン (Guðbergur Bergsson 1932～) は南西部のグトルプリングシスラ (Gullbringusýsla) の南端、当時は小さな漁村だったグリンダヴィーク (Grindavík) で、猟師で大工の父親の息子として生まれた。同地はアメリカ軍基地があるケプラヴィーク飛行場の周辺に位置する。55 年に教員免許を取得した後にスペインに渡り、バルセロナ大学で 58 年までスペイン文学と美術史を学んだ。その後は教員を除く種々の職に就いて文学作品を書き、78 年以降は職業作家となって、膨大な作品群を発表している。スペイン滞在を数多く重ね、セルヴァンテスの『ドン・キホーテ』、ヒメネス、ロルカ、コロンビアの作家マルケスなどの作品を翻訳し、スペイン語・ポルトガル語文学の代表的な紹介者でもある。

グヴズベルグルは前述のスヴァーヴァ・ヤーコプスドウフティル、トウル・ヴィルヒャウルムソンなどとともに、戦後の現代小説の代表的開拓者である。グロテスクなユーモアを交えて伝統的なアイスランドのイメージを覆し、現代社会の矛盾を鋭く突く作品は、海外でもきわめて評価が高い。処女小説『忍び足のねずみ』 (*Músín sem læðist* 1961) では、ノイローゼの母親から虐待を受ける少年が大人の世界を嫌って自分の殻に閉じこもる様子を描き、伝統的な物語形式を取っていた。しかし、老齡の元銀行員がレイキャヴィークの

自宅のアパートで回想録を書くという設定の『トマス・ヨウンソン、ベストセラー』(*Tómas Jónsson, metsölubók* 1966)からは手法を変え、フランスのヌーヴォーロマン風の断片的で時間的に錯綜する超現実主義的な語りの世界に転じた。結婚生活での夫婦のすれ違いを12の独立したエピソードに綴り、全体としてひとつの小説にまとめた『むつまじい夫婦たちの愛』(*Ástir samlyndra hjóna* 1967)、3世代家族内の価値観の相違をテーマにした『アンナ』(*Anna* 1969)も同様である。この一連の小説は、舞台が上述のトマスの親族が住む架空の村、「岬」を意味するタウンギ(Tangi)に設定されており、「タウンギ物語」(Tangasögur)と呼ばれる。タウンギ村はキュープラヴィークのアメリカ軍基地周辺に位置し、溶岩地帯と荒野に囲まれた寒村という想定で、故郷のグリンダヴィークでの思い出が投影されている。地方の農民社会と家族にまつわる牧歌的イメージを暴き、政治色を何ひとつ見せずに、戦後最大の社会問題を痛烈に風刺している。『むつまじい夫婦たちの愛』からは『選ばれた女』(*Hín útvalda*)の日本語訳がある(菅原邦城訳、谷口幸男編『現代北歐文学18人集』)。短編集『神様の食べ物とは何か』(*Hvað er eldi guðs?* 1970)でも不条理と抽象性を追及した。

80年代以降は実験的な小説技法を離れて、時間軸に沿った写実的な語りの性格を強めるようになった。一方、空想的でグロテスクなユーモア、社会的偏見にたいする自由な批判精神はますます旺盛になっている。アルシンギから芸術家年金を支給され、次の2作で「アイスランド文学賞」を例外的に2度、受賞するなど、大作家の地位を不動にしている。まず、中編小説『白鳥』(*Svanurinn* 1991)は、万引きした娘を更正させようと両親が田舎の農場に送るが、少女はそこで自然と動物の密接な共生に憧れを抱き、山に登り、白鳥とともに飛び去るという筋書きで、白鳥を中心に象徴的暗示をちりばめた作品である。もうひとつ、『父と母と幼年時代の神秘』(*Faðir og móðir og dulmagn bernskunnar* 1997)は続編『海に磨かれた石のように』(*Eins og steinn sem hafið fágur* 1998)とともに、著者の少年時代の思い出に創作を交えた自伝的創作小説(skáldævisaga)である。前述のソウルベルグル・ソウルザルソンの作品を想起させるが、構成はきわめて自由であり、全体はグ

ヴズバルグルが誕生した夜の描写で終わる。

出典

- ヨウン・ウール・ヴェール『真冬の日々』(Jón úr Vör: *Útmánuðir*) (Ingi Bogi Bogason et al. (útg.). 1987: 40-41)
- ステイトン・ステイナル『時間と水』(Steinn Steinarr: *Tíminn og vatnið*) (Steinn Steinarr: *Kvæðasafn og greinar*. Reykjavík. Helgafell. 1964: 165-178), 『春』(Vor) (Ingi Bogi Bogason et al. (útg.). 1987: 145)

- *本研究は科研費(21520425)の援助を受けたものである。
- *本稿は本稿の印刷中に刊行された拙著『北歐アイスランド文学の歩み——白夜と氷河の国の六世紀——』(現代図書2009)の内容に基づいて、さらに手を加えたものである。

参考文献

- Andersen, Erik (udg.). *Islandske Noveller*. København. Norden. 1945.
- Andrés Kristjánsson et al. (útg.) *Íslenskir þennar. Sýnisbók íslenskra smásagna á tuttugustu öld*. Reykjavík. Setberg S-F. 1956.
- Andrésson, Kristinn E./Bruno Kress (Hrsg.). *Isländische Erzähler*. Berlin. Aufbau-Verlag. 1963.
- Árni Sigurjónsson/Peter Hallberg (utg.). *Tanken strövar vida. 25 ísländska smásögur*. Reykjavík. Mál og menning i samarbete med Bokklubben Norden. 1990.
- Ásgeir Pétursson/Steingrímur J. Þorsteinsson (eds.). *Seven Icelandic Short Stories*. Reykjavík. The Ministry of Education. 1960.
- Bandle, Oskar et al. (eds.). *The Nordic Languages. HSK 22.1/2*. Berlin/New York. de Gruyter. 2002/05.
- Bartoczek, Stanislaw/Anh-Dao Tran. *Icelandic for Beginners*. Reykjavík. Bréfas skólinn. 1991.
- Bartúske, Heinz (übers.). *Moderne Erzähler der Welt: Island*. Tübingen/Basel. Erdmann. 1976.
- Bartúske, Heinz/Ingeborg Drewitz/Sigurður Magnússon (Hrsg.). *Land aus dem Meer. Zur Kultur Islands und der Färöer Inseln*. Tórshavn. Emil Thomsen. 1980.
- Beck, Richard (ed.). *Icelandic Lyrics. Originals and Translations*. Reykjavík. Þórhallur Bjarnarson. 1930.
- Beck, Richard (ed.). *Icelandic Poems and Short Stories*. Princeton. Princeton Univer-

- sity Press for the American-Scandinavian Foundation. 1943. (Repr. Freeport, New York. 1968).
- Bergkvist, Sven O./Heimir Pálsson (övers.). *Berättelser från Island*. Stockholm. Rabén & Sjögren. 1976.
- Bien, Horst (Hrsg.). *Nordeuropäische Literaturen*. Leipzig. VEB Bibliographisches Institut. 1980.
- Birr, Ewald (Hrsg.). *Literatur aus Nordeuropa*. Berlin. Willi-Bredel-Bibliothek, Stadt- und Bezirksbibliothek Rostock. Zentralinstitut für Bibliothekswesen. 1990².
- Bjarni M. Gíslason. *Íslands litteratur efter sagatíden. ca. 1400-1948*. København. Aschehoug Dansk Forlag. 1949.
- Björn Þorsteinsson/Bergsteinn Jónsson. *Íslands saga til okkara daga*. Reykjavík. Sögufélag. 1991.
- Boucher, Alan (tr.). *Short Stories of Today by Twelve Modern Icelandic Authors*. Reykjavík. Iceland Review. 1972.
- Brøndsted, Mogens. (Hrsg.). *Nordische Literaturgeschichte 1, 2*. München. Fink. 1984.
- Dóra Hafsteinsdóttir/Sigríður Harðardóttir (ritstj.). *Íslenska alfræðiorðabókin. I-III*. Reykjavík. Örn og Örlygur. 1990.
- Einar Kristjánsson. *Septemberdagar*. Akureyri. Bókaútgáfa Pálma H. Jónssonar. 1952.
- Einar H. Kvaran. *Ritsafn III. bindi*. Reykjavík. Prentsmiðjan Leiftur. 1969.
- Einar Laxness. *Íslandssaga I-III*. Reykjavík. Vaka-Helgafell. 1998² (1995).
- Erlendur Jónsson. *Íslensk bókmenntasaga 1550-1950*. Reykjavík. Bókagerðin Askur. 1977⁵ (1960).
- Eskeland, Ivar (utg.). *Island forteller*. Oslo. Den norske Bokklubben. 1979.
- Firchow, Evelyn Scherabon (ed.). *Icelandic Short Stories*. Boston. Twayne Publishers & The American Scandinavian Foundation. 1974.
- Franz Gíslason/Sigurður Magnússon/Wolfgang Schiffer (Hrsg.). *Wortlaut Island. Isländische Gegenwartsliteratur*. Bremerhaven. Wirtschaftsverlag NW Verlag für neue Wissenschaft. (edition die horen 26). 2000.
- Friese, Wilhelm. *Nordische Literaturen im 20. Jahrhundert*. Stuttgart. Kröner. 1971.
- Glauser, Jürgen (Hrsg.). *Skandinavische Literaturgeschichte*. Stuttgart/Weimar. Metzler. 2006.
- Guðbergur Bergsson. *Maðurinn er myndavél*. Reykjavík. Forlagið. 1988.
- Guðmundur Andri Thorsson (útg.). *Þjóðskáldin. Úrval úr bókmenntum 19. aldar*. Reykjavík. Mál og menning. 1992.
- Guðmundur A. Th. et al. 2006a/b → *Íslensk bókmenntasaga IV / V*.
- Guðmundur Friðjónsson. *Ritsafn I*. Reykjavík. Bókaútgáfa Guðjóns Ó. Guðjónssonar.

- 1949.
- Guðmundur Hálfðanarson. *Historical Dictionary of Iceland*. Lanham, Maryland et al. The Scarecrow Press. 2008² (1997).
- Guðrún Kvaran/Sigurður Jónsson frá Arnarvatni. *Nöfn Íslendinga*. Reykjavík. Heimskringla/Háskólaforlag Máls og menningar. 1991.
- Gugenberger, Eva/ Mechthild Blumberg (Hrsg.). *Vielsprachiges Europa*. Frankfurt a. M. et al. Peter Lang. 2003.
- Gunnar Gunnarsson. *Dimmufjöll. Sögusafn*. Reykjavík. Almenna bókafélagið. 1976.
- Gunnar Gunnarsson. *Smaa Historier*. Kjøbenhavn et al. Gyldendalske Boghandel. Nordisk Forlag. 1922³.
- Gunnar Karlsson (tr. Anna Yates). *A Brief History of Iceland*. Reykjavík. Mál og menning. 2000.
- Halldór G. et al. 1996 → *Íslensk bókmenntasaga III*.
- Halldór Kiljan Laxness (Ingegerd Nyberg-Fries/Peter Hallberg/Leif Sjöberg (övers.)). *Píplekaren. Noveller*. Stockholm. Rabén & Sjögren/Vi. 1955.
- Halldór Laxness (udg. Chr. Westergård-Nielsen). *Noveller*. København. Steen Hasselbalchs Forlag. 1944.
- Halldór Laxness (übers. von Ernst Harthern). *Die gute Jungfrau und andere Erzählungen*. Hamburg. Rowohlt. 1958.
- Halldór Laxness. *Þættir*. Reykjavík. Helgafell. 1954².
- Halldór Stefánsson. *Sögur og smáleikrit*. Reykjavík. Heimskringla. 1950.
- Hannes Pétursson. *Sögur að norðan*. Reykjavík. Helgafell. 1961.
- Hannes Pétursson/Helgi Sæmundsson. *Íslenskt skáldatal a-1/m-ö*. Reykjavík. Bókaútgáfa Menningarsjóðs og Þjóðvinafélagsins. 1973/76.
- Haugen, Einar. *Die skandinavischen Sprachen*. (übers. von Magnús Pétursson). Hamburg. Buske. 1984.
- Heimir Pálsson. *Straumar og stefnur í íslenskum bókmenntum frá 1550*. Reykjavík. Iðunn. 1978.
- Heimir Pálsson. *Frá lærdómsöld til raunsæis. Íslenskar bókmenntir 1550-1900*. Reykjavík. Vaka-Helgafell. 1999.
- Heimir Pálsson. *Sögur, ljóð og líf. Íslenskar bókmenntir á 20. öld*. Reykjavík. Vaka-Helgafell. 1999.
- Helga Kress/Idar Stegane (utg.). *Lystreise og andre islandske noveller*. Oslo. Pax Forlag. 1976.
- Helga Kress (ritstj.). *Draumur um veruleika. Íslenskar sögur um og eftir konur*. Reykjavík. Mál og menning. 1977.

- Helga Kress (red.). *Drøm om virkelighet. Islandske noveller om og av kvinner*. Oslo. Tiden Norsk Forlag. 1979.
- Henriksen, Carol et al. (eds.). *Studies in the Development of Linguistics in Denmark, Finland, Iceland, Norway and Sweden*. Oslo. Novus Forlag. 1996.
- Horton, John J. *Iceland. World Bibliographical Series vol. 37*. Clio Press. Oxford/Santa Barbara. 1983.
- Hovdhaugen, Even et al. (eds.). *The History of Linguistics in the Nordic Countries*. Jyväskylä. Societas Scientiarum Fennica. 2000.
- Ingi Bogi Bogason et al. (útg.). *Gegnum ljóðmúrinum. Safn íslenskra ljóða á 20. öld*. Reykjavík. Mál og menning. 1987.
- Íslandsklukkan*. MR Music. 1994.
- Íslensk bókmenntasaga I-II*. Vésteinn Ólason (ritstj.), *III*. Halldór Guðmundsson (ritstj.), *IV-V*. Guðmundur Andri Thorsson (ritstj.). Reykjavík. Mál og menning. 1992-93, 1996-2006.
- Jakob Thorarensen. *Tíu smásögur*. Reykjavík. Almenna bókafélagið. 1956.
- Jakobina Johnson (tr.). *Northern Lights. Icelandic Poems*. Reykjavík. Bókaútgáfa Menningarsjóðs. 1959.
- Jakobína Sigurðardóttir. *Púnktur á skökkum stað*. Reykjavík. Heimskringla. 1964.
- Jóhann Hjálmarsson. *Íslensk nútímaljóðlist*. Reykjavík. Almenna bókafélagið. 1971.
- Jóhannes Nordal/Valdimar Kristinsson. *Iceland. The Republic*. Reykjavík. The Central Bank of Iceland. 1996.
- Jón Dan. "The Elfkin. A Short Story". (tr. Mekkin S. Perkins). *The American-Scandinavian Review*. Vol. 47. 1959. 67-72.
- Jón Dan. *Pytur um nótt*. Reykjavík. Heimskringla. 1956.
- Jón R. Hjálmarsson. *History of Iceland. from the Settlement to the Present Day*. Reykjavík. Iceland Review. 1993.
- Jón Trausti. *Ritsafn VI*. Reykjavík. Bókaútgáfa Guðjóns Ó. Guðjónssonar. 1965.
- Kennta, M. E./Gabriele Stauner/Sigurður A. Magnússon. *Svona er Ísland í dag*. 2000. Reykjavík. Háskólaútgáfan.
- Knüppel, Christine (Hrsg.). *Isländische Literatur in deutscher Übersetzung 1860-2000*. Köln. Seltmann & Hein. 2002.
- Kress, Bruno (Hrsg.). *Erkundungen. 27 isländische Erzähler*. Berlin. Verlag Volk und Welt. 1981²(1980).
- Kristinn E. Andrésson. *Íslenskar nútímabókmenntir 1918-1948*. Reykjavík. Mál og menning. 1949.
- Kristinn Kristjánsson. *Íslenskar bókmenntir 1550-1900*. Reykjavík. IÐNÚ. 1996.

- Kristján Eiríksson/Sigurborg Hilmarsdóttir. *Bókastoð. Ágrip af íslenskrí bókmenntasögu*. Reykjavík. ÍDNÚ. 1999.
- Kristján Karlsson (ritstj.). *Íslenskar smásögur 1847-1974. I-III*. Reykjavík. Almenna bókafélagið. 1982-83.
- Kristmann Guðmundsson. *Völuskrín*. Reykjavík. Almenna bókafélagið. 1961.
- Lindroth, Hjalmar (utg.). *Från Island. Nutidanoveller i översättning*. Uppsala. Lundequistska Bokhandeln. 1932.
- Lyhne, Otto. (red.). *Lademanns Leksikon. 1-4*. København. Lademann. 2003
- Magnús Pétursson. *Isländisch*. Hamburg. Buske. 1978.
- Mitchell, P. M./Kenneth Ober (eds.). *Bibliography of Modern Icelandic Literature in Translation. Islandica XL*. Ithaca/London. Cornell University Press. 1975.
- Napóleon Bónaparti. Smásögur 1880-1960*. Reykjavík. Mál og menning. 1998⁵.
- Neijmann, Daisy (ed.). *A History of Icelandic Literature*. Lincoln & London. Nebraska University Press/The American-Scandinavian Foundation. 2006.
- Nordstrom, Byron J. (ed.). *Dictionary of Scandinavian History*. Westport, Connecticut/London. Greenwood Press. 1990.
- Ober, Kenneth H. (ed.). *Bibliography of Modern Icelandic Literature in Translation, 1971-1980. Islandica XLVII*. Ithaca/London. Cornell University Press. 1990.
- Ober, Kenneth H. (ed.). *Bibliography of Modern Icelandic Literature in Translation, 1981-1992*. Norwich. Norvik Press. (Scandinavica. Supplement) 1997.
- Ólafur Jóhann Sigurðsson. *Kvistir í altarinu*. Reykjavík. Víkingsútgáfan. 1942.
- Paul, Fritz (Hrsg.). *Grundzüge der neueren skandinavischen Literaturen*. Darmstadt. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 1982. 343-376.
- Poestion, Joseph Calasanz (Hrsg.). *Isländische Dichter der Neuzeit in Charakteristiken und übersetzten Proben ihrer Dichtung*. München/Leipzig. Georg Müller. 1905² (1897).
- Runquist, Åke. *Moderna nordiska författare*. Stockholm. Forum. 1966.
- Sigurður Nordal. *Íslensk lestrarbók 1750-1930*. Reykjavík. Bókaútgáfan Þjóðsaga. 1980¹⁰ (1924).
- Silja Aðalsteinsdóttir. *Bók af bók. Bókmenntasaga og sýnisbók frá 1550-1918*. Reykjavík. Mál og menning. 1993.
- Simek, Rudolf/Hermann Pálsson. *Lexikon der altnordischen Literatur*. Stuttgart. Kröner. 2007.
- Stefán Einarsson. *History of Icelandic Prose Writers 1800-1940*. Ithaca, New York. Cornell University Press. 1948.
- Stefán Einarsson. *A History of Icelandic Literature*. Baltimore. The John Hopkins

- Press/The American-Scandinavian Foundation. 1957.
- Stefán Einarsson. *Íslensk bókmenntasaga 874-1960*. Reykjavík. Snæbjörn Jónsson & Co. H. F. 1961.
- Steinn Steinarr. *Við opinn glugga*. Reykjavík. Smábókaflokkur Menningarsjóðs. 1961.
- Steinn Steinarr. *Kvæðasafn og greinar*. Reykjavík. Helgafell. 1964.
- Steinn Steinarr. *Tíminn og vatnið — Die Zeit und das Wasser*. (übers. v. Marita Bergsson). Münster. Kleinheinrich. 1987.
- Stevens, Patrick J. (ed.). *Dictionary of Literary Biography: Icelandic Writers, vol. 293*. Farmington Hills MI. Gale. 2004.
- Svava Jakobsdóttir. *Veizla undir grjóttvegg*. Reykjavík. Helgafell. 1967.
- Tómas Guðmundsson. *Ljóð Tómasar Guðmundssonar*. Reykjavík. Almenna bókafélagið. 1989.
- Vésteinn Ó. et al. 1992-93 → *Íslensk bókmenntasaga I/II*.
- Vigdís Finnbogadóttir (valdi). *Íslensk kvæði*. Reykjavík. Mál og menning. 1989.
- Víkingur Kristjánsson/Porfinnur Skúlason (útg.). *Upplýsingaröldin. Úrval úr bókmenntum 18. aldar*. Reykjavík. Mál og menning. 2000.
- Westergård-Nielsen, Chr. (red.). *Ny nordisk Novellekunst*. København. C. A. Reitzels Forlag, Alex Sandal. 1942.
- Wolf, Kirsten/Árný Hjaltadóttir (tr.). *Western Icelandic Short Stories*. Winnipeg. University of Manitoba Press. 1992.
- Zimmermann, Lutz (Hrsg.). *Europäische Anthologie: Neue Literatur aus Litauen, Albanien, Island und Finnland*. Berlin. Literarisches Colloquium. 1988.
- Zuck, Virpi (ed.). *Dictionary of Scandinavian Literature*. New York/Westport, Connecticut/London. Greenwood Press. 1990.
- Porgils gjallandi. *Sögur*. Reykjavík. Rannsóknarstofnun í bókmenntafræði og menningarsjóður. 1978.
- Örn Sigurðsson (ritstj.). *Kortabók Íslands*. Reykjavík. Mál og menning. 2000.
- 浅井辰郎／森田貞雄 『アイスランド地名小辞典』 帝国書院. 1980.
- グウズベルグル・ベルグスソン (菅原邦城 訳) 「選ばれた女」 谷口編 (1987: 181-195).
- 清水 誠 「現代アイスランド文学作品集 (1)-(5)」 『ノルデン 28-30, 32-33号』 ノルデン刊行会. 1991: 27-65, 1992: 21-56, 1993: 21-57, 1995: 33-49, 1996: 17-59.
- 清水 誠 「アイスランド語」 (石井米雄 編 『世界のことば・辞書の辞典 ヨーロッパ編』 三省堂. 2008: 360-376.
- 清水 誠 「アイスランド語研究と辞書編集の歴史」 『日本アイスランド学会会報第28号』 2009: 1-34.

- シーグルズル・ノルダル (菅原邦城 訳) 『巫女の予言：エッダ詩校訂本』 東海大学出版会、1993.
- スヴァヴァ・ヤコブスドットィル (金子貞雄 訳) 「子供のための話」谷口編 (1987：197-207)
- スウェンソン (伊藤 保 訳) 『ノンニと氷のお国』 エンデルレ書店、1948.
- スウェンソン (山口四郎 訳) 『ノンニの冒険』 (世界児童文学全集 23) あかね書房、1960.
- スノリ・ストゥルルソン (谷口幸男 訳) 『ヘイムスクリングラ：北欧王朝史 1, 2』 北欧文化通信社、2008-09.
- ソルザソン・美也子 『風がよごれていない国 アイスランド』 同時代社、2001.
- 谷口幸男 訳 (小澤俊夫 編) 『世界の民話 アイスランド』 ぎょうせい、1985.
- 谷口幸男 編 『現代北欧文学 18 人集』 新潮社、1987.
- ハルドール・キリヤン・ラックスネス (山室 静 訳) 「原爆基地」 (『ノーベル賞文学全集 13 ラックスネス、カミュ、アンドリッチ』) 主婦の友社、1972：18-122.
- ハルドール・ラックスネス (渡辺洋美 訳) 『極北の秘教』 工作社、1975.
- ハルドール・ラックスネス (谷口幸男 訳) 「魚釣り行」 谷口編 (1987：209-238).
- H. ラックスネス (山室 静 / 林 譲二 / 山口琢磨 訳) 『独立の民』 大日本雄弁会講談社、1957.
- 森田貞雄 『アイスランド文法』 (大学書林) 1981.
- ラックスネス (坂井松太郎 訳) 「リーリャ」 (『世界文学大系 94 現代小説集』) 筑摩書房、1969：377-382.
- ヨウン・アウトナソン編 (菅原邦城 訳) 『アイスランドの昔話』 三弥生書店、1979.
- ヨン・スウェンソン (上沢謙二 訳) 『ノンニ兄弟の冒険』 厚生閣、1937.
- ヨン・スウェンソン (山室 静 訳) 『ノンニの冒険』 (世界名作全集 82) 講談社、1954.